

地域研修報告書

2010

連携事業：浅妻ゼミⅠ（旭川市・旭川電気軌道株式会社）、
川村ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ（札幌地域労組）、佐藤ゼミⅠ（音威子府村）、
水野谷ゼミⅠ・Ⅱ（鹿追町立鹿追小学校）、
山田ゼミⅠ・Ⅱ（札幌市平岸中央商店街振興組合）

浅妻ゼミⅡ（大阪府大阪市・滋賀県彦根市・滋賀県長浜市）、伊藤ゼミⅡ（美唄市）、
内田ゼミⅠ（八雲町）、内田ゼミⅡ（神奈川県相模原市・千葉県浦安市）、
大貝ゼミⅠ（帯広市）、大貝ゼミⅡ（倶知安町）、奥田ゼミⅠ・Ⅱ（室蘭市）、
北倉ゼミⅠ・Ⅱ（長沼町）、小坂ゼミⅠ・Ⅱ（苫小牧市）、
小田ゼミⅠ・Ⅱ（栗山町）、佐藤ゼミⅡ（下川町）、徐ゼミⅠ・Ⅱ（札幌市・芦別市）、
高原ゼミⅠ・Ⅱ（江別市・下川町）、西村ゼミⅠ・Ⅱ（夕張市）、
平野ゼミⅠ・Ⅱ（札幌市）、古林ゼミⅠ（標津町）、
古林ゼミⅡ（新ひだか町・様似町・浦河町・日高町）、
水野ゼミⅠ・Ⅱ（当別町・月形町・沼田町）、山田ゼミⅠ（函館市）
山田ゼミⅡ（沖縄県那覇市・糸満市・浦添市・北谷町・読谷村）

faculty 北海学園大学 経済学部

[経済学科・地域経済学科]

tel. TEL: (011) 841-1161 (内線2222)

url. <http://www.hokkai-s-u.ac.jp>

<http://www.econ-hgu.jp>

name



2010年度

『地域研修報告書』の発行にあたって

北海学園大学経済学部長

奥田 仁



「地域研修」は2003年の地域経済学科発足に当たってカリキュラムに加えられ、その後経済学科でも実施されるとともに、「教育研究高度化推進特別補助事業」に採択されるなど、その取り組みが各方面から高い評価をいただきました。

経済学部では経済学の基礎的理論から応用まで体系的なカリキュラムを準備し、なかでもゼミナールを1年次から4年次まで配置することによって face to face の少人数教育に力を入れてきました。このゼミナール教育と結び付けて地域研修を発足させたわけですが、振り返ると、私たちが予想していた以上に大きな成果をあげてきたと思われまます。それは、①ともすれば座学に終わりがちな学生にとって、多様な地域の実態にふれることが学習への刺激と動機付けをもたらしていること。②学生が主体的に地域研修プログラムを作り、その成果を12月の「地域研修報告会」でのプレゼンテーションにまとめるなど、いわゆる能動的学習として効果的に機能していること。③地域において学生の視点からの調査結果や意見を述べることで、ささやかではあれ大学と地域の連携に貢献していること。④そして泊りがけの地域研修で苦勞を分かち合うことで学生同士の結びつきが強まること、などがあげられるでしょう。

この研修は、なによりも地域住民や自治体・企業・団体など皆さまのご協力によってはじめて成り立っているといえます。この研修を通じて頂戴する数多くのご好意は、地域で日夜努力されている皆様が、後に続く学生たちを育てようとしてくださる熱意の現われと受けとめております。これらのご協力に対して、ここにあらためて厚く御礼を申し上げます。

CONTENTS

北海学園大学経済学部 ● 地域研修報告書2010

1 地域研修1年間の流れ・研修地一覧

地域連携事業ゼミ報告

- 2 浅妻ゼミⅠ [旭川市・旭川電気軌道株式会社]
乗合バス利用促進を目的とした利用実態・利用者ニーズの把握
- 4 川村ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ [札幌地域労組]
特別養護老人ホームにおける介護労働者の労働実態調査
- 6 佐藤ゼミⅠ [音威子府村]
北海道の過疎問題-音威子府住民の生活実態から学ぶ-
- 8 水野谷ゼミⅠ・Ⅱ [鹿追町立鹿追小学校]
鹿追町の小中高一貫教育に関する調査研究
- 10 山田ゼミⅠ・Ⅱ [札幌市平岸中央商店街振興組合]
地域情報の整理・発信による札幌市豊平区商店街の活性化活動

地域研修ゼミ報告

- 12 浅妻ゼミⅡ [大阪府大阪市・滋賀県彦根市・長浜市]
現場で学ぶ交通まちづくり
- 13 伊藤ゼミⅡ [美唄市]
美唄市にみるコマコを活用したまちづくり
- 14 内田ゼミⅠ [八雲町]
八雲町における地域づくり
- 15 内田ゼミⅡ [神奈川県相模原市・千葉県浦安市]
「平成の大合併の実態と課題」「都市農業の現状と課題」「観光・リゾートとまちづくり」
- 16 大貝ゼミⅠ [帯広市]
帯広における中小企業振興基本条例と中小企業の取組み
- 17 大貝ゼミⅡ [倶知安町]
観光振興と地域づくり
- 18 奥田ゼミⅠ・Ⅱ [室蘭市]
物づくりの町室蘭と中小企業のネットワーク

- 19 北倉ゼミⅠ・Ⅱ [長沼町]
グリーンツーリズム・part 7
- 20 小坂ゼミⅠ・Ⅱ [苫小牧市]
王子製紙苫小牧工場とトヨタ自動車北海道の比較
- 21 小田ゼミⅠ・Ⅱ [栗山町]
栗山町～環境を育むまちづくりの実践に学ぶ
- 22 佐藤ゼミⅡ [下川町]
下川町の地域資源を活かした地域づくり
- 23 徐ゼミⅠ・Ⅱ [芦別市・札幌市]
北海道企業の中国進出と北海道の中国観光客誘致
- 24 高原ゼミⅠ・Ⅱ [江別市・下川町]
地元産品の地域ブランド化のための経済ネットワーク
- 25 西村ゼミⅠ・Ⅱ [夕張市]
財政再生団体・夕張市～再生への息吹を探る～
- 26 平野ゼミⅠ・Ⅱ [札幌市]
国際貢献に関する札幌市議会議員の意識調査
- 27 古林ゼミⅠ [新ひだか町・様似町・浦河町・日高町]
軽種馬の生産・育成・流通および利用
- 28 古林ゼミⅡ [標津町]
サケを中心とする地域産業の形成
- 29 水野ゼミⅠ・Ⅱ [当別町・月形町・沼田町]
朝鮮人強制労働および四人労働の跡地を訪ねる
- 30 山田ゼミⅠ [函館市]
函館の地域メディアの現状と戦略の調査
- 31 山田ゼミⅡ [沖縄県那覇市・糸満市・浦添市・北谷町・読谷村]
沖縄の地域メディアの現状と地域社会を体験する
- 32 地域研修報告会
- 33 地域連携事業ゼミ現地報告 [水野谷ゼミⅠ・Ⅱ]

地域研修は夏休みに行われる現地研修（フィールドワーク）が中心ですが、そのためには事前の学習、研修後にその成果をレポートにまとめる作業、報告会でのプレゼンテーションまで、これまでの教室での講義・理論の要素に加え、実践的な学びが必要とされる複合的な学習です。

4月 地域研修ガイダンス

地域研修担当教員から当該年度の地域研修に関するガイダンスを受けます。

5月 事前学習（研修テーマなどの決定）

ゼミ担当教員の指導のもと、ゼミ単位で研修対象地域の社会、経済状況などについて、関連自治体・団体などから提供された資料によって、研究対象地域の概要を勉強します。

8月 地域研修実施

おおむね夏休み後半から10月初旬にかけて現地研修を行います。現地研修では関連自治体・団体・企業などからのヒアリングを行い、関連施設の見学や実地見聞、実態調査などを行って研修内容を深めます。

12月 地域研修報告会

地域研修の成果に基づいて報告レポートを作成し、ゼミ単位で発表を行い研修成果をゼミ相互で確認しあいます。

3月 地域研修報告書の作成

地域研修報告会の発表レポートをもとに、研修の成果を報告書としてまとめます。

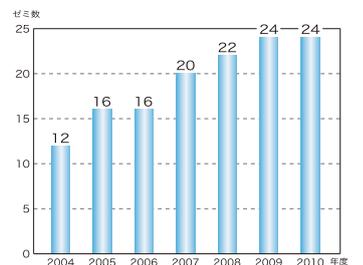
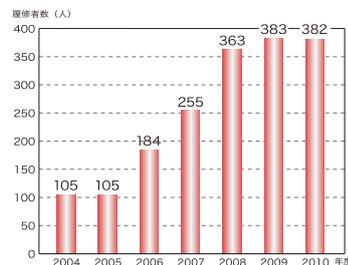


研修地一覧



北谷町・読谷村 山田ゼミⅡ
 那覇市・浦添市・糸満市 山田ゼミⅡ

地域研修履修者数と実施ゼミ数



浅妻裕ゼミ I

ASAZUMA Yutaka Seminar I

参加学生数 7人



浅妻 裕
経済学科
准教授

乗合バス利用促進を目的とした利用ニーズとその実態の把握

【事業申請名称】 旭川市と旭川電気軌道株式会社との連携による乗合バス利用促進への取り組みを通じた社会貢献事業

●連携内容

今回、旭川市と「北海学園大学経済学部浅妻ゼミナールと旭川市総合政策部まちづくり推進課による社会貢献協力に関する覚書」、旭川電気軌道株式会社と「北海学園大学経済学部浅妻ゼミナールと旭川電気軌道株式会社による社会貢献協力に関する覚書」を取り交わし、浅妻ゼミナールが実施する地域研修に対して、旭川市と旭川電気軌道が必要な協力をを行うこととなった。

旭川電気軌道からは、乗合バス事業の現状について、レクチャーを受けた。さらに調査員の移動に便宜を図っていただき、緊密な連携関係を築いた。旭川市役所からは、乗合バスの活性化に向けた施策に関する説明を受け、その情報をアンケート調査の際に活用した。

●研修地・研修日程 旭川市・北見市

9月8日	旭川市電気軌道株式会社ヒアリング、乗合バス利用者アンケートの実施
9月9日	乗合バス利用者アンケートの実施、旭川市役所にてヒアリング
9月10日	北見市においてバス利用実態調査の実施、研修成果のまとめ方に関する打ち合わせ
9月11日	帰札

研修目的

旭川市では、高齢化の進展や中心市街地の空洞化により、乗合バス利用者数の減少が続いている。公共交通を守る、という観点からは、利用ニーズやその実態把握を行い、利用者をつなぎ止める施策につなげていく必要がある。今回の地域研修では、ここに焦点をおいて、乗合バス利用者にアンケートを実施した。なお、事業者・自治体の取り組みの現状把握を目的としたヒアリングも同時に実施した。

総括

アンケート結果の概要を紹介する。アンケートは、バス停でバスを待っている利用者に対する対面式の調査とした。合計813名（男性215名、女性598名）に対し、改善が望まれる点、利用活性化のために望ましい施策（いずれも選択肢から3つを選択）など、9項目について聞き取りを行った。調査対象者の属性を確認すると、年齢層は比較的高齢者層に偏ったが、調査員から状況を聞く限りでは、おおよその利用者の属性傾向と一致しているようだ。

利用者から、もっとも強い改善要望が出ていたのが、「便数の増加」である。近年、バス事業者の経営環境が悪化する中で、1時間に複数の便が走っていたような幹線系統も含めて大幅な便数の削減が行われている。これは旭川市に限ったことではない。対象者の3名に1名がこの要望を有しており、その中でも、10歳代から40歳代の通勤・通学を利用目的とした利用者からこの要望が多かった。他に、改善要望の多かったものとして「乗客マナーの改善」があげられる。通学生に対する指摘が多くなされたが、同世代の利用者からの指摘が目立ったことも印象的であった。

多くの利用者が便数の増加への要望を有する一方で、事業の現状は厳しく、国や自治体の路線バス維持費補助制度が大きく変わらない限り、事業者は便数を減らさざるを得ないのが現状である。このジレンマの中で、地域の輸送動向や、利用者のニーズを的確にとらえ、選択的にサービスを提供していくことが求められる。特に、今回の調査を通じ、情報提供の充実や運賃割引制度の導入が結果的に利用者をつなぎ止めている側面もあることがわかった。便数が減少し、いつでも乗れるという路線が少なくなる中で、それ以外のサービス水準を維持・向上させる取り組みは不可欠である。

この調査結果は、今後の事業者や自治体の利用活性化への取り組みに活用されるであろう。この点で、本事業は、一定の貢献を行ったと総括することができる。なお、この調査結果は「旭川市乗合バス利用者アンケート調査報告」（浅妻ゼミナール I、2010年12月17日発行）としてまとめた。

写真キャプション

① 熱心に説明を聞く（旭川市役所）。② 旭川市役所ヒアリングの様子。③ 813名へのアンケートを実施しました。④ 高架化直前の旭川駅。駅前広場にバス停が集約される計画もある。⑤ 医大病院でのアンケート調査。⑥ 口頭で説明しながら答えてもらいます。⑦ 旭川市民の皆さんありがとうございました。⑧⑨ 地域研修報告会での一コマ。



連携先からの報告

乗合バス利用者アンケート報告書に関して

旭川電気軌道株式会社 運輸事業部 河西利記

このたびは、フィールドワークでの利用者アンケートの実施とその集計という大変な作業結果をまとめていただき、ありがとうございます。地方交通、とりわけ路線バス事業に関する実態は、経営的には非常に厳しいといわざるを得ません。しかし、悲観してばかりはいられないそのエネルギー源はこれらのレポート（旭川市乗合バス利用者アンケート調査報告）の中にあるような気がします。地域にとって、生活する人にとってのバス事業のあり方を模索していかねばならないと感じます。「バスが走っているから乗る」ではなく、「乗って移動したいからバスが走る」社会への大きな転換期だと思っています。離農、都市集中、少子化、モータリゼーションの過去の変動の中からこれからは移動権、地球環境、高齢者福祉など新たな切り口でのバスという交通手段を見ていかねばならないと感じます。少子化に伴う社会的変化も大きくなってきています。通学に送り迎える親の増加、通学用の貸切バスを配備しないと学生が集まりにくい学校の実態など課題は多くあります。

いっぽう世代を超えたコミュニケーションの場としての乗合バスの社会教育的意義なども感じます。乗合バスはまさに公共空間であるという認識が希薄になっていることは、アンケート中でのモラル・マナーへの指摘という項目で如実に現れています。次世代を担う若者にバスについての意識を持ってもらえることは事業者としてこんなにうれしいことはありません。今後のバス事業者としての社会的責任を果たしていくためにも、本レポート（旭川市乗合バス利用者アンケート調査報告）は実に有意義であるといえます。ありがとうございました。

(2010年12月18日)

学生研修記

旭川市でのアンケート調査を通じて



太田 順也

経済学科2年
千歳高校出身

今回の地域研修では、乗合バスの利用者に対するアンケート調査を実施しました。改善して欲しい点や、望ましい施策に関する質問について、直接利用者から聞き取りを行いました。利用者の声としてもっとも多かったのが、本数を増やしてほしいというものでした。ただ中には、本数を増やすだけでは意味はないと思う、という現実的な答えもありました。文献や資料だけでは知ることができない、利用者の生の声を聴くことができ、利用者がバスを本当に必要としていることがわかったと思います。

ヒアリング調査では、旭川市役所、旭川電気軌道株式会社の方から、通常聞くことができないような会社の深いところまでお話を伺うことができました。バスの利用者が減少している中、少ない補助金と企業努力で補っているということが印象に残りました。中でも、高校生を対象としたマルバス（1ヶ月5,000円で旭川電気軌道のバス路線全線乗車可能）がとても身近に感じられ、印象に残りました。

今回の研修では、利用者のリアルな意見を聞き、それを調査報告書としてまとめたことによって、バス利用の促進やそれに伴う市街地の活性化のために、多少なりとも貢献ができたのではないかと思います。

乗合バスの利便性向上と利用者の声



垣内 啓生

地域経済学科2年
紋別北高校出身

今回の旭川市・北見市での研修では、初日に旭川電気軌道株式会社でヒアリングをし、お年寄りの乗客者への配慮としてノンステップバスを全国で初めて導入したお話や、外国人観光客への対策として運転手に最低限の英語のアドバイスカード渡しているといった、利便性向上のためのお話などを聞きました。さらに、旭川市役所にもヒアリングを行い、「旭川市バス交通活性化アクションプラン」について解説してもらいました。

また、二日間に分けて旭川市内のバス停で待っている人を対象にバス利用に関するアンケートを実施しました。アンケート総数は813枚となり、改善をして欲しい点では、運行本数の増加を望むバス利用者が多いことがわかり、とりわけ、30歳代から50歳代のバス利用者が、本数の増加をはじめとした改善を強く求めていることがわかりました。また、私たちがこのアンケート調査をする時、実際に、バスに乗って移動していると色々なことに気がつきました。バスの運転手さんが赤信号で止まっている時にアイドリングストップをし、環境への配慮をしていること、バス利用者の多くが女性であることなどです。なお、調査3日目に北見市でも利用実態調査を行いました。旭川市と比べて利用者数が極端に少なく、高齢者層に利用が偏っていたのが印象に残りました。



9



10



11



12

旭川電気軌道株式会社の概要

旭川市の乗合バスは、主に旭川電気軌道と道北バスが担っている。旭川電気軌道は主に市内エリアを担っており、利用者数の点からは、旭川市で最大のバス会社である。ICカードやノンステップバスの導入を全国に先駆けて行っていることもあり、注目すべきバス事業者である。

旭川市総合政策部 まちづくり推進課の概要

旭川市まちづくり推進課は、公共交通機関、中心市街地、都市機能の増進等の総合調整に関することなどを業務としている。



4



5



6

写真キャプション

④ ステップが低い旭川電気軌道バス。⑤ 駅前に散在するバス停。⑥ 幹線系統は日中でも混雑。



7



8

川村雅則ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ

KAWAMURA Masanori Seminar I・II

参加学生数 13人



川村 雅則

経済学科
准教授

特別養護老人ホームにおける介護労働者の労働実態調査

【事業申請名称】 地域の労働組合等と連携した保育労働や介護労働の在り方に関する調査研究事業

●連携内容

特別養護老人ホームで調査を行った。今回のような調査研究は、関係者の協力なくしては実現不可能である。第一に特養の施設長から、聞き取り（札幌市内の特養29カ所）と、アンケート（道内の特養81カ所）の協力を得た。第二に、特養施設長ならびに今回の事業連携先である札幌地域労組から協力を得て、介護労働者からアンケートを集めた（合計851部の回答）。また札幌地域労組には、12月の介護シンポジウムで、介護現場の実態を報告していただいた。

●キーワード

1) **介護報酬**：介護サービス事業者や施設が、利用者にサービスを提供した際に、対価として事業者を支払われるサービス費用のことです。介護報酬は各サービスの基本的なサービスの提供にかかる費用に加えて、各事業所のサービス提供体制や利用者の状況等によって、加算・減算される仕組みになっています。また、3年ごとに改定されます（2003年の改定は-2.3%。2006年改定では-2.4%）。

2009年の改定では、介護保険制度制定後では初めてプラス改定（+3.0%）となりました。これは介護従事者の処遇の改善を目的としたものです。

2) **介護職員処遇改善交付金**：2009年度の介護報酬改定に加えて、他業種・職種との賃金の格差を是正し介護力員のさらなる処遇改善を図るために事業者への資金（常勤換算の介護職員1人当たり月額平均1.5万円）の交付を行ったものです。

※以上は、厚生労働省ホームページに掲載された説明に手を加えたものである。

●研修地・研修日程 札幌市

8～9月	札幌市内の特養で施設長から聞き取り調査
9～10月	道内の特養の施設長ならびに介護労働者を対象にアンケート調査を実施
9～12月	調査結果のとりまとめ作業
12月	調査報告書（『介護に希望と笑顔を一知ってください 介護を支えるひとたちのこと』）を発行。シンポジウム（「介護地獄はもうごめん!!介護に希望と笑顔を!! part2」）を開催

研修目的

介護を必要とするひとびとが増えている。が、その担い手である介護労働者の確保が困難な状況にある。その背景には一この間のマスコミ報道等でも知られるようになったとおり一生活するのに困難な低賃金、人手不足・夜勤など過重労働負担の問題などがある。そうした状況の改善のために、2009年度にははじめて介護報酬が増額改定され、介護労働者の処遇改善を目的とした交付金制度も設けられた。これで状況は改善されると期待もあったが、依然として現場は厳しい状況にある。その実態を明らかにして、介護・介護労働の改善に貢献することを目的とした。

総括

両調査（聞き取り、アンケート）からみえてきた、介護現場の問題や改善課題等を報告する。

第一に、介護報酬の増額改定・処遇改善交付金制度の設置で介護現場が一息ついたのは確かである。給与の改善が多く職場で行われていた。しかしながらそれは、施設によっては、過去の減額改定にともなう労働条件の切り下げを補うものであるなど、なお十分な水準にはほど遠い。今回の報酬改定が全体の底上げではない（基本報酬の改定ではない）ことや、改定幅が十分でないため、人件費に全てをまわすわけにはいかないという施設側の苦悩もある。

第二に、賃金の改善を感じさせないほどの労働負担の増加という問題がある。利用者の要介護度の重度化・医療行為を必要とするケースの増加など、働く側の負担が増しているのだ。ただでさえ、介護現場は人手不足で一その背景には、不十分な人員配置基準という、制度的な欠陥がある一、思うような介護ができないという悩みがあったが、そこに拍車がかかっている。提供される介護の質の改善のためにも、労働負担の解消が急がれる。

第三に、上記の点とも関わるが、労働者の過労・健康面の問題が深刻である。極端に人手が不足する中での夜勤負担・ストレス（しかも月にそれが4,5回も）、慌ただしい現場で不穏になった利用者や認知症の利用者からの虐待、利用者家族からの理解が得られないことなどが、介護労働者の疲弊を増幅させている。慢性的な疲労を訴える彼らの声には、介護現場の持続可能性の危機が示されている。

ほかにも、同じ仕事をさせていながらも非正規雇用で雇わざるを得ないことや、相次ぐ離職と残された労働者の負担増という悪循環など、現場の疲弊が調査を通じて明らかになった。

もともと、そういう中でも、介護労働者をはじめ関係者は利用者の生活改善・権利擁護に献身的につとめている。わが国の介護を支える役割を彼らだけに押しつけるわけにはいかない。社会全体で支える必要がある。そのためにも、もっと介護現場のことを市民に知ってもらおう。

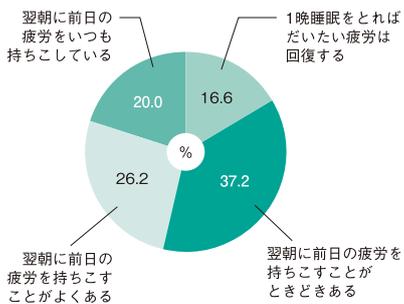
そうした問題意識で、第一に、学生が中心となって、報告書を作成した。

(<http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp/~masanori/2010kaigo> からダウンロード可)。

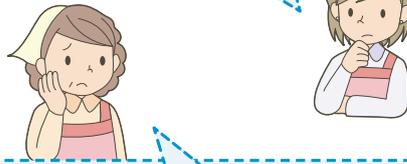
第二に、授業時間を使って、事業連携先である札幌地域労組と公開シンポジウムを開催した。市民の参加もあり盛況に終わった。また当日のようすは業界紙などでもとりあげられた。

介護現場はこんなに大変ー調査報告書「介護に希望と笑顔を」より

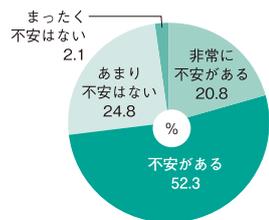
最近の疲労の回復状況 (n=833)



夜間眠らない利用者、徘徊する利用者が増え、負担が増した。休憩時間は2時間設定されているも、ほとんどとれない。しかも、夜勤明けは休みとみなされ、次の日は大体が仕事（早番）があり、全く疲れがとれない。
女性 / 20歳代



健康や体力面での不安の有無 (n=838)



重度の利用者と軽度の利用者が混在しており、夜間のコール対応が大変である（夜間のトイレ誘導だけで20回以上）。オムツ交換・体位交換は50回ほどあり夜勤での休憩は1分もない状態であり、人手不足で夜勤明けで残業している。
女性 / 40歳代

認知症の利用者が多く、ナースコール対応が多く、不穏利用者による転倒事故予防に追われ精神的負担が大きい。
男性 / 50歳代

学生研修記

【介護労働者の「思い」を保障するために】



佐竹孝紀

経済学科2年
紋別北高校出身

介護保険制度が導入されてちょうど10年を迎えました。2009年には介護報酬がプラス3%改定され、介護職員処遇改善交付金がつくれるといった介護の現場での制度的改善が行われました。そうした改善が実際の介護の現場でどのような影響を与えたのかなどを明らかにするために今回の調査を行いました。まずは、札幌市内46カ所の特別養護老人ホームのうち29カ所に訪問させていただき、施設長からお話を聞きました。次に、道内の特養の施設長と介護労働者にアンケートを送付し、回答してもらいました。また、その結果をより多くの人に知ってもらいたいと思い、報告書も作成しました。

介護の現場で問題となっているのは仕事の内容・時間に合わない低賃金、長時間労働から来る精神的・身体的疲労、それがゆえに離職が多く、新たな働き手が見つかりにくくなっていることなどが挙げられます。2009年度の改定では多くの施設で不十分であるとの声を多く聞きました。実際に働いている多くの介護労働者の方々は「やりがい」を持って働いています。「利用者にいいサービスを提供したい。」「お年寄りとかかわりたい。」そうした労働者の人たちの「思い」によって成り立っています。そうした労働者の「思い」を保障するために制度をもっと充実させていく必要があるのだと今回の調査で強く感じました。介護労働者が働きやすくなることは利用者にも良いサービスを提供できることにもつながります。利用者の目線で介護を考えることは重要です。しかし、そこに利用者を支えている介護労働者がいることを常に忘れてはならないのだと思います。

そしてこの問題は私たち一人一人が考えていくべき問題であると思います。私たちの調査で介護の現場を多くの方々に知ってもらえることを強く願っています。

【介護調査・研究を体験して】



石上千里

経済学科2年
富良野高校出身

私たち川村ゼミの地域研修のテーマは、介護でした。

今、なぜ介護を調査したのかというと、2010年は介護保険制度が始まってちょうど10年目の年でした。また、2度の改定のたびに減額されていた介護報酬が初めて3%増加したことや、介護職員処遇改善交付金制度が創設されたことなどは介護の現場にどのような影響を与えたのかを明らかにして、介護現場の実態を多くの人に知っていただくためです。

はじめに、本を読んで介護について学びました。その後に、実際に札幌市内の特別養護老人ホームを訪問して施設長さんなどからお話を伺いました。それと並行して全道の特養の施設長さんと介護労働者に対してアンケート調査も行いました。

どの施設でも、休んだり止まっている介護労働者を目にすることはなく、常に動き続け、常に利用者さんの対応をする介護労働者の様子を見て、いかに現場が大変なのかということを知りました。

私は、この調査を行うまで介護に関心がなく、ほとんど考えたことはありませんでした。

しかし、今回の調査を通して介護現場の状況を知り、想像以上に大変な状況にあることを知りました。今回の私たちの活動によって、一人でも多くの人に介護の現状を知っていただき、介護の労働環境が少しでも良い方向に変わっていくことを心から願っています。



川村ゼミ報告書 2010.12 発行

●札幌地域労組の概要

今回、事業連携した札幌地域労組は、「札幌近郊の約100職場に単組・支部を置き、約2,900名の組合員が加盟」しており、「あらゆる職種、階層の労働者に門戸を開いて」いる労組である。介護労働者も数多く組織している。労働組合である以上、労働条件の改善に取り組むのはむろんのことであるが、同時に、特養で暮らす利用者の生活改善・権利擁護という観点で運動を進め、業界の発展・改善に大きなインパクトを与えている。

<http://www.infosnow.ne.jp/~sgu/>

なお、文書での連携こそしていないが、多くの特養施設関係者にご協力をいただいたことを記しておく。

写真キャプション

①② 事前準備中。③ 聞き取り中。④⑤ 学内で行った「介護現場はどうなった? 介護現場の検証とこれからの考えるシンポジウム」。



佐藤信ゼミ I

SATO Makoto Seminar I

参加学生数 12人



佐藤 信
地域経済学
教授

北海道の過疎問題—音威子府住民の生活実態から学ぶ—

【事業申請名称】 音威子府村における住民生活調査を通じた地域再生への貢献事業

●連携内容

同村住民を対象に高齢者生活実態調査を実施し、調査結果と提言を音威子府村に還元することによって、過疎化の進行する道北の地域再生へ貢献するプロジェクトである。具体的には、音威子府村の2つの集落を対象として、そこに住む65歳以上の二人世帯及び一人暮らしの世帯を抽出する。次に、学生調査班を結成し、インタビューによる生活実態調査を実施することとする。調査項目は、家族構成、健康状態、買い物・通勤のための交通手段、趣味、友人との交流関係等である。

●研修地・研修日程 音威子府村

9月13日	出発 音威子府村役場 おといねづ美術工芸高等学校、エコミュージアムおさしまセンター 天塩川温泉宿泊
9月14日	音威子府村保健福祉センターを拠点としてヒアリング調査
9月15日	咲来集落の公民館にてヒアリング調査 市街老人クラブにて調査結果の報告

研修目的

北海道の周辺自治体の多くで過疎・高齢化が進んでいる。本研修では、北海道で最も人口の少ない音威子府村の住民、特に高齢者を対象として、生活の実態を明らかにすることを目的として、ヒアリング調査を実施した。併せて、調査結果を住民に還元するための報告会を調査期間中に実施し、住民と意見交換を行うように計画をすすめた。



ヒアリング調査の拠点とした音威子府村保健福祉センター

総括

今回の研修は、音威子府村の協力を得て、村内に居住する高齢者（65歳以上の夫婦世帯および単独世帯）に対して生活実態に関するヒアリング調査を行った。対象となった111世帯のうち、時間の関係もあり、実際に話を伺えたのは30世帯であった。主なヒアリング項目は、家族構成、現在までの経歴、健康状態や通院状況、買い物先と買い物手段、食生活内容、生活費、趣味、将来の意向など生活全般におよぶ。調査の結果、旧国鉄や農業をかつての職業としている高齢者が非常に多く、リタイア後も村施設の管理人や農業を続けている人が見られた。通院状況を見ると、独居や周辺集落に住む高齢者は村内診療所の利用割合が高く、市街地に住む高齢者は村外への通院割合が高い傾向が見られた。また、交通の便の良さ、近所づきあいの深さ、必要最低限の生活関連施設の存在などから、今後も住み続けたいと回答する高齢者が多かった。

「限界集落」に関する事前の文献学習などでは、どちらかといえば住民生活の消極面が指摘されていたが、直接高齢者に話を聞くうちに、農山村の小さな村と言っても、最低限の生活条件が確保されている限りは、現状の暮らしに満足しており、これからも長く住み続けていきたいという意向が強いことに気づかされた。他方、冬の除排雪が大変なこと、診療所のお医者さんがいなくなった時の不安など、いくつかの課題も浮き彫りにされた。

ゼミ生のほぼ全員が音威子府村への初めての訪問であった。事前にアンケート用紙の全戸配布を行うなど、村の状況を把握できるよう努めたが、もう少し時間が必要であった。学生は、予想よりもはるかに住民とうち解けて話ができていた。本学大学院生や名寄市立大学との共同調査でもあったが、関係者との交流の時間を取ってもよかったと思う。

写真キャプション

- ① 保健福祉センターで聞き取り調査の打ち合わせ。
- ② 村内の農協店舗の視察。③ 夕食の焼き肉。
- ④⑤⑥ 高齢者の家庭を訪ねて聞き取り調査。⑦ アンケート用紙のポストイング。⑧ 音威子府そばで昼食。⑨ 宿で調査結果報告の準備を行う。⑩ 老人クラブで調査結果の報告。



【連携先からの報告】

【地域研修に関わって】

音威子府村住民課 鎌田真守

音威子府村は、「国鉄の村」として発展し、併せて国道40号線、国道275号線の分岐点でもあり、道北交通の要衝地として位置づけられてきましたが、昭和59年代以降からの国鉄合理化、分割民営化、旧天北線の廃止などが相次ぎ、人口が激減、平成17年以降は1千人を割り、現在（この調査研修時）の人口は895人（65歳以上高齢者人口比率27.2%）で、北海道一人口の少ない自治体となっています。

このような状況下の音威子府村を、北海学園大学経済学部の佐藤教授から、ゼミの学生による社会貢献事業（地域研修）として、住民を対象とした生活実態調査を行いたいとの申し出が村長にあり、村としても住民の生活意識を知ることが今後の行政運営に興味深く大いに参考になり得ることだろうということで、協力する運びとなりました。

村民全世帯を対象とする「日常生活に関するアンケート」、高齢者世帯を实际足で歩きヒアリングを行った「住民生活実態調査」と、学生が汗をかき知らない土地で活動し、知らない人とお話しをされ研修を行った努力に、大いに感銘を受けました。また、最終日には音威子府地区、咲来地区の老人クラブに研修結果、感想を報告し、老人クラブのみなさんと交流を図られたことも、たいへん良かったことと思います。

今回の研修に参加された佐藤ゼミの学生のみなさん、決して札幌市のような都市部だけではなく、音威子府村のような地域があって北海道が成り立っていることを忘れず、視野の広い賢い人になっていただき、将来の北海道の屋台骨を担う人材へと躍進してください。

また、この地域研修が、若き人材の育成に資するものであれば、今後も音威子府村として協力は惜しみません。

【学生研修記】

【おといねっランドへようこそ！】



及川達也

地域経済学科2年
札幌厚別高校出身

今回の研修では、北海道で一番人口が少ない村音威子府に行ってヒアリング調査などを行いました。調査内容としては、各グループに分かれ65歳以上の高齢者を対象として各家庭を訪ねて、簡単なアンケート調査を行いました。調査をしていて印象に残ったのが、村の住民の「明るさ」でした。質問に対しても親切に答えてくれて、中にはドラクエをしているおばあちゃんもいました。また小学生とすれ違うと「こんにちは！」と声をかけられ札幌では考えられない風景に驚きました。

調査の結果を見ると住民と役場の信頼関係など興味深い結果が出ました。他の大学とも協力し、地域調査をすることができたのでいろいろという経験ができた研修でした。

【音威子府の地域研修で見たこと】



荻谷倫樹

地域経済学科2年
北見緑陵高校出身

今回の佐藤ゼミでは地域研修の土台となる事前学習を行ってから、音威子府という北海道で一番人口の少ない村に地域研修に行くというスケジュールでゼミをすすめてきました。事前学習をしているとき印象に残ったのは、人口減少・高齢化とともに、生活に何らかの支障をきたしている場合が多く、全国のいくつもの集落が開閉策を考え、住民の生活を守ろうとしていたことです。

しかし、音威子府でアンケートや聞き取り調査を行うと、商店が商品をデリバリーしており、診療所や保健センター、郵便局や消防署など最低限の生活をするには問題ない状況が明らかとなりました。もちろん、これから先のことについて同じことが言えるとは限りませんが、地域研修に行くまで「人口の少ない集落の人間はこういう生活でとても困っている」という考えは当てはまらず、現地調査がいかに大切なのか、身をもって実感することができました。

◎音威子府村の概況

音威子府村は、北海道北部に位置し、村の中央を天塩川が通っている。四囲が山岳の狭隘な盆地的地形のため、寒暖の差が著しく、酷暑時には30度以上、厳寒時にはマイナス30度以下にもなる。道内でも有数の豪雪地帯である。これまで馬鈴薯を主とする畑作農業、乳牛を飼育する酪農業を中心に営まれてきたが、従事者の高齢化、後継者不足、生産調整や価格の低迷などで、現在は農家数が1ヶタの状況である。



4



5

写真キャプション

④ おといねっぶ美術工芸高校の卒業作品。⑤ 砂澤ビッキとその作品。



6



7



8



9



10



11



12

水野谷武志ゼミ I・II

MIZUNOYA Takeshi Seminar I・II

参加学生数 17人



水野谷 武志
地域経済学科
准教授

鹿追町の小中高一貫教育に関する調査研究

【事業申請名称】 鹿追小学校との連携による地域教育発展に関する貢献事業

●連携内容

鹿追町の小中高一貫教育推進にあたって中心的な役割を担っている鹿追町立鹿追小学校の舟越校長先生と「北海学園大学経済学部水野谷ゼミナールと鹿追町立鹿追小学校による社会貢献協力に関する覚書」を取り交わした。舟越先生との連携の下で、鹿追町小中高一貫教育研究大会への参加、調査研究論文の執筆、研修結果報告および意見交換会を実現させることができた。

●研修地・研修日程 鹿追町

2010年	
9月2日	鹿追町郷土資料館
9月3日	鹿追町小中高一貫教育研究大会に参加
9月4日	鹿追町内の視察（道の駅しかおい、鹿追町神田日勝記念美術館、観光農園にしかみ、鹿追町ライディングパーク、道の駅うりまく）
10月18日	鹿追小学校を訪問して舟越校長先生に聞き取り調査を実施
2011年	
2月22日	鹿追町民ホールにて研究成果報告および意見交換会を実施

研修目的

鹿追町では文部科学省の研究開発学校の指定を受けながら英語と環境に関する教科について独自の小中高一貫教育を展開し、地域教育の発展を地域づくりの重要な要素に位置づけている。また鹿追町は、2010年9月3日に小中高一貫教育研究大会を開催し、取り組みの成果と課題を広く公開している。

本研修では、鹿追町小中高一貫教育の推進に中心的な役割を果たした鹿追小学校関係者へのヒヤリング、上記研究大会への参加、意見交換会の実施を通して、鹿追町の課題とその改善策を提示することによって、地域教育及び地域づくりのさらなる発展に貢献することを目的とした。

総括

9月3日の研究大会ではまず、午前中に鹿追小学校、鹿追中学校、鹿追高校で一貫教育科目であるカナダ学（コミュニケーション能力を育成する英語教育）と地球学（鹿追町の豊かな自然を基礎にした環境教育）などの公開授業があり、ゼミ生を3グループに分けて、各校の公開授業を視察した。午後には小中高一貫教育に関する講演会を聴講した。

10月18日には小中高一貫教育推進における中心的人物である鹿追小学校の舟越校長に聞き取り調査を実施し、鹿追の取り組みについて理解を深めた。

以上の現地調査の成果として、鹿追町の取り組みにおける現状と課題をふくめてゼミナール論文にまとめ、12月19日に中央大学多摩キャンパスで開催された、第57回全国学生経済ゼミナール大会で発表した。ゼミナール論文（全8章構成）では、研究テーマを「日本における学力の現状と学力向上への取り組み—北海道の事例調査をふまえて—」として、第1部（第1～5章）において日本の学力の現状をめぐる諸問題を既存資料にもとづいて論じ、第2部（第6～8章）において北海道内でゼミ生自身が実施した各種調査結果をまとめ、特に第6章において鹿追町の取り組みについて論じた。

翌年の2月22日には、これまでの研修成果をふまえて、鹿追町の小中高一貫教育の持続的なさらなる発展に貢献することを目的として、鹿追町の課題とその改善策を提案するために鹿追町を訪れた。舟越先生の他、町内の小中学校・高校の教頭先生、町教育委員会の方々との協力の下に意見交換会を開催することができた。詳しい内容については最終ページの「研修成果報告・意見交換会の開催」に譲るが、会に参加された先生方は学生の考えた率直な改善案を好意的に受け止めて、今後の参考にしたいと言ってくださった。研修全体を通じて感じたのは、外部に対する鹿追町教育関係者のオープンな姿勢とそこから学び取ろうとする積極的な態度であった。私たちの聞き取り調査や意見交換にも積極的に応じていただいた。長年にわたって町をあげて一貫教育を推進し、すでに成果を出している現状にも甘んじることなく、町子どもたちの教育向上を第一に考え、そのためには外部の意見や考え方も意欲的に取り入れようとする前向きな姿勢は、鹿追町における地域教育の発展を支える1つの原動力ではないだろうか。舟越先生をはじめ、町教育委員会や小中学校・高校の先生方に改めて今回の連携事業への協力に感謝したい。

写真キャプション

- ① 鹿追町郷土資料館。
- ② 鹿追町小中高一貫教育研究大会視察準備。



連携先からの報告

【北海学園大学の学生の真摯な姿勢に感激しました】

鹿追小学校校長 舟越洋二

水野谷先生からお話があった時は経済学部か多少戸惑いましたが、事前に打ち合わせに来られたときに、私から鹿追町の小中高一貫教育を進めた背景や考え方、その後の経過や現在課題となっていることについて話したところ、真剣に耳を傾けていただきました。

また、実際に見てもらうのが一番と、昨年9月3日に開催した小中高一貫教育研究大会にお誘いしたところ当日は20名近くのゼミの学生が、各授業会場や分科会場に分かれ熱心にメモを取っていました。その後、まとめた論文についても事前に目を通させてもらいましたし、鹿追での意見交換会にも参加して意見を述べさせていただきました。その間、学生さんたちの真摯な態度や対応に感銘を受けていました。リーダーの井澤ゼミ長が一生懸命に引っ張っているからでしょう。

私が、学生さんに一番伝えたかったことは、課題を解決するに当たって、まずは、地域の願いや子どもの実態など、「現状を良く見極めること」、次に「何が一番有効で何が出来るか作戦を練ること」、そして「必ず実際に実行してみること」です。どれだけ考えても、実際に実行しないと何も始まらないし、何も見えて来ません。実際にやった人にしか物事の本質は見えて来ません。是非、実際に実行する人になって欲しいと思います。



学生研修記

【鹿追町で出会った「学びの本質」】



市川明枝

地域経済学科2年
札幌北高校出身

研修で訪れた鹿追町では、小中高一貫教育を導入している。この度、好機にも、我々は研修と同時期に開催される、小中高一貫教育の研究大会に参加させていただき運びとなった。私は、小学校で行われた公開授業「カナダ入門」「地球科」の2つを見学した。前者は英語を用いたの異学年交流、後者は新エネルギーの利用に関する学習、と両者は学習内容が大きく異なる分野であるが、自らの頭で思考し、積極的に発言できる生徒を育てたいという共通した目的のもとで成り立っていた。また、町とカナダ（姉妹町が存する）のかかわり、町において実践される新エネルギーの利用を学ぶことを通して、故郷の特長を再確認・再発見させたいとする意図も、ともに見られた。そして何より、生徒らが楽しみながら授業に参加している事実を目にし、その姿勢と授業自体に好意的な印象を受けた。

意欲や関心をもつこと。何事を学ぶにしても、これありきで学びが始まり、知識や考え方が我々の血となり肉となっていく。他人に押し付けられ、与えられるだけの学びから身につくものがどれくらいあるだろうか。生徒たちには学ぶことの喜びをいつまでも忘れず、鹿追町の明るい未来を担う、頼もしい存在に成長して欲しいものである。厚かましくもそんなことを思いながら、研修を終えたのだった。

【鹿追町での意見交換会】



山田貴之

地域経済学科3年
岩見沢緑陵高校出身

地域研修で9月に小中高一貫教育を推進している鹿追町に訪れ、小中高一貫教育研究大会に参加させていただいたのだが、研究大会に参加して様々な疑問点生まれ、より理解を深めたいということもあり、連携先の協力を得て2月22日に鹿追町民ホールにて意見交換会の時間を作ってくださった。意見交換会には、町内の小・中・高の教頭先生や鹿追町教育委員会の方が参加され、その中で研究大会に参加した感想や私たちが考える改善策を提案させていただいた。研究大会などに学生が参加された例はなく、学生目線の感想に関心を示してくださった。改善策については、例えば、町外から鹿追高校に入学してくる町外生への対応については、「町外生への課題学習を増やし、手厚く保護していくべき」という改善策を提案したところ、「小・中学校は義務教育であるため、国の管轄の下に町が主体的に関われるが、高校は北海道の管轄であるため、そこの一貫を図ることが難しい」との現状があるとの回答をいただいた。うなずける回答である一方で、この難しい課題を乗り越えることができれば鹿追町の取り組みはさらに発展することができるのではないかと感じた。

意見交換会に参加したことによって、私たちが抱えていた疑問点が解消でき、理解を深めることができたし、また学生なりの意見や改善策を提案することで、より活発な意見交換会を行うことができた。そして、実際に現場に足を運び、調査したことによって、様々な現状や課題を見出すことができ、大変貴重な経験ができたと感じた。

最後にお忙しい中、貴重なお時間を作ってください、快く受け入れてくれた先生方・教育委員会の方々に改めて感謝したい。

●鹿追町小中高一貫教育の概要

英語教育と環境教育において12年間の一貫した独自カリキュラムを町内すべての小中学校および高校で連携・展開する、鹿追ならではの小中高一貫教育のことである。2003年度から開始されたこの一貫教育は、町内全小中学校・高校において文部科学省研究開発学校指定を受けて推進されている。英語教育では、英語によるコミュニケーション能力の育成プログラム、環境教育では、鹿追町の豊かな自然環境を活用した教育プログラムが展開される。また鹿追町の特徴として、カナダ・ストニブレイン町との姉妹町提携を活かして、鹿追高校1年生の希望者全員をストニブレイン町に短期留学派遣したり、ストニブレイン町から外国語指導助手（ALT）を招いて鹿追町の英語教育に活かしていることがあげられる。

写真キャプション

③④ 鹿追町小中高一貫教育研究大会。⑤ 町内の視察（神田日勝記念美術館）。⑥⑦ 鹿追小学校を訪問、舟越先生から聞き取り。



山田誠治ゼミⅠ・Ⅱ

MIZUNOYA Takeshi Seminar I・II

参加学生数 27人



山田 誠治

地域経済学科
教授

地域情報の整理・発信による札幌市豊平区商店街の活性化活動

【事業申請名称】 地域情報の整理・発信による札幌市豊平区商店街の活性化活動

●連携内容

今回、山田ゼミナールでは、「北海学園大学経済学部山田ゼミナールと平岸中央商店街振興組合による社会貢献に関する覚書」を平岸中央商店街振興組合と交わしました。机上で学んだ経済学の知識を実践するために、今回は、ゼミで探求している地域情報の活用やコミュニケーションのあり方の研究成果を活用して、その方向を模索することを課題としました。統計分析や商店街活性化に関する情報の整理、商店街での経営状況に関する店舗調査、および消費者ニーズアンケート調査、そして地域メディアの役割についての調査活動を行い、商店街で活用してもらい、情報発信の地域メディアについて考えるのが連携の中身です。

今年度は、その課題の前半部分のみの統計分析と商店街活性化に関する情報の整理、商店街での経営状況に関する店舗調査、に留まりました。この結果は、『平岸商店街の経営・街づくりに関するアンケート調査報告（第一次分：平岸中央店舗調査）』、北海学園大学経済学部山田ゼミナール、2011年3月、にまとめられている。

写真キャプション

①②④ 商店街の店舗・事業所に意識調査アンケートを配布。③ 平岸商店街。



●研修地・研修日程 札幌市

2010年	
10月8日	ゼミナールII・3年生の平岸中央商店街振興組合・地域サロン「びらけし」へ訪問、事前調査
10月18日	ゼミナールI・2年生の平岸中央商店街振興組合・地域サロン「びらけし」へ訪問、事前調査
11月12月	各統計分析・調査企画・アンケートの検討
2011年	
1月14日	平岸中央商店街地域に商店の意識調査のアンケートを配布
1月3月	アンケート分析

研修目的

札幌市を含め全国の多くの商店街は、大型店・チェーン店の過大な出店競争や経営者の高齢化などが進展して、様々な課題を抱えている。これは、札幌市の平岸商店街でも同様な事情である。しかし、商店街の動向は、同時に街の元気さに直結しており、市街地の活性化についても様々な取り組みが行われている。そこで、今回の研修では、街を元気にすることを目的に、ゼミで学んでいる地域情報の活用やコミュニケーションのあり方の研究成果を活用して、その方向を模索することを課題とした。

総括

山田ゼミⅠ・Ⅱでは、地域に関する情報・コミュニケーションについて基礎的な学習を積み上げながら、地域を元気にするメディアや情報発信について研究している。そこで、今回は、2年生のゼミⅠは、統計・HP情報などを収集して、平岸商店街、および札幌の他の類似の商店街の比較することで、データからわかる平岸商店街に関する情報を収集整理した。

また、3年生のゼミⅡでは、平岸商店街の店主さんの経営動向および街づくりについてのアンケート調査を行い、さらに、平岸駅地域の利用者および消費者に対し、平岸商店街という街や店舗についての意識やニーズ調査を実施し、さらに平岸からの情報発信をしている地域メディアについての在り方を探求する、という課題を設定した。

諸事情があり、利用者および消費者への意識やニーズ調査、また、それらを踏まえた地域メディアの在り方についての研究は、実行できず、次年度の課題とせざるをえなかった。

これまでの取組で解ったことは、この平岸地域の傾向として、長く営業を続けてこられた店舗と比較的若い店舗があり、また、顧客の年齢層も結構幅広く、まだまだ高齢化とまで言えるほどの偏りがあるわけではない。各店主さんたちは、顧客層の動きの難しさやそのつかみ方に苦心されており、多かったのは、店舗の飾りの工夫、チラシ・広告の強化、品揃え、値引きなど、であるが、接客の姿勢やコミュニケーションの面で力をいれているというものも多かった。お客さんが少ない、という傾向の中で、リピーターとして繰り返し利用してもらえるような工夫だと考えられ、また、信用という地域性を生かすために商店街がその存在意義を発揮できる意味でツボを得た工夫を多くの店がしているのがわかります。

ただ、商店街としての連携については、必ずしも積極的な回答は多くなく、連携の方向がどういふものがあるべきなのか、街の魅力を輝かせるには、課題がある。

しかし、では、街をどう元気にしていくのか、という点では、回答は、実に多岐にわたり、非常にたくさんのアイデアもだされていた。個々の店で努力できる事、また、いろいろな面からの掘り下げをしながら、街の歴史や成り立ちを生かす、店のやる気を指摘するものも多くあった。大型店の影響、交通の変化などの問題もあるが、地域としての方向が示されれば、新たな展開が期待できる。地域の集客力をたかめ、人々がつどい、ただ商店街だけのためでなく、でも商店街も輝かないと街の輝きもないのだ、という面からアプローチが求められているのかと思われる。今後の「平岸人」に期待したい。

連携先からの報告

【アンケート調査報告書について】

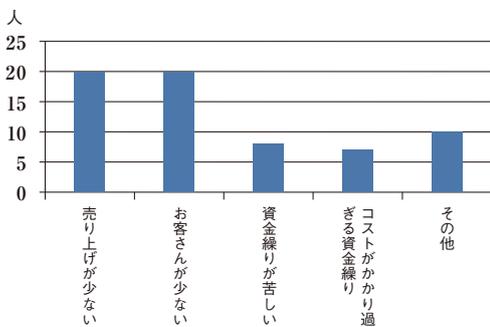
平岸中央商店街振興組合 副理事長 奥瀬健治

今回の北海学園大学経済学部の子田ゼミの報告書を見て、いろいろなことを想起されました。たとえば、結構店舗のお客さんの年齢層が幅広く、必ずしも平岸の商店街が年輩やお年寄りの人たちがばかりではないことに気づかされました。確かに、近くの大学や専門学校が立地していることを考えると、これからも、若者をどう定着拡大させるか、が商店活性化の一つのポイントになると思います。

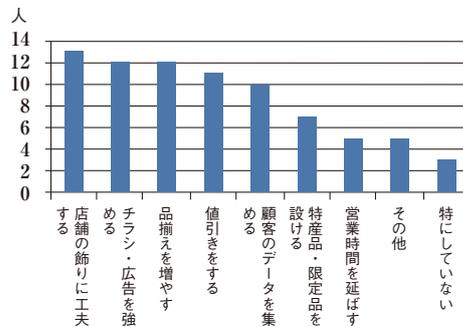
また、お店自慢のアンケート結果についても興味深いものがあります。商店街の振興組合の理事会と各個店とのつながりを強めることはこの地域で大事な課題だと考えているので、このような意識調査は役に立ちます。近年でも、新しい店舗ができては、必ずしもすべてがうまく定着していません。その意味で、もっとネットの活用や駐車場の整備拡大などの要望など、街づくりに関することからでも、もっと現役のお店とのつながりを深めることの大切さが結果にでていていると思います。今、この平岸という街づくりをどうするか、で、たとえば街の原点であるりんごの木をもっと生かしていくこととか、文化財やまちの博物館として生かせる施設や可能性もあるので、この面からも、もっと広く力を集めて取り組んで生きたいと思えます。特に、この調査が大学によってなされていることから考えると、歴史があって古いものがあるこの平岸の街と、若い人たちの意識とを結びつけていくことに一つの活路が出だせるのではないかと、とも思えます。この調査は、そういうきっかけを与えてくれていると思います。



質問3 営業で大変な事（複数回答）



質問4 お客さんを増やす工夫（複数回答）



平岸の人たちのお店自慢の調査データ

- 他店にはないメニューの品揃え・味付を意識しています。できるだけ仕入価格を抑える努力（業者に頼り切らず、自分で商品を探し出す等）とその上での売価もお手頃にしています。
- 納得するまで治療の説明をします。
- 品揃へ価格面ではお客様に喜ばれております。
- 長年の営業に対しての自信、将来の計画はなし→成りゆきませ。
- 従業員の勤続年数が皆長いので、それぞれ独立させてあげたいと思えます。
- 地域密着で顧客を大事にします。リピーターの確保、口コミの多い店を目指す。
- 親しみやすさを第一に、また来たくなる様な店づくりを心がけています。リピーターになってもらう事で、安定収入を目指しています。
- 従業員同士のコミュニケーションが活発で、意思伝達がスムーズであること。
- 定休日を月一回にしています。いつでも開いているという事をPRする為。
- 地域の方をはじめ、お客様に喜んでいただけるお店を目指していきたいと思えます。
- ほとんどの事を手作りしている事、手抜きしていない事、それを継続している事。
- 魚料理、特に刺身に力をいれていて、ふぐ等もだしている。
- 駅に近い、店舗を定期的に改装しきれいにしていく。
- 鮮度とデザイン。
- 道内初登場のブランドなどを数多く揃えている。又、道内で活動する作家、職人さんと協同で新たなプロジェクトなどに取り組んでいる。商品ジャンルのしぼり込みと深化を図り、専門分野に特化した店舗へのマイナーチェンジ。

- 自信を持って美味しい物を出す事。
- 店長がかわいい、からあげがおいしい。
- なし。
- スタッフが親切、ていねい！アットホームな雰囲気！店舗の増設。
- 内装が良く落ち着いた安らぐと言って下さる。店主が元氣なかがり続けようと思う。
- 自慢かどうかはわかりませんが、医者2人で従業員を置かず、徹底的に親切にやっています。病院が乱立する中、この特色を生かし、みなさまに愛される病院として生き残っていきたくと思っています。
- 明るく、アットホームな職場です。一人のお客様ではなく、店全体のお客様として考え社員全員で接客しています。
- 事業のプロとしての技術レベル。まだまだ至らないのですが、最近の業態の大型化に伴い全ての意味でプロフェッショナルなレベルが失われています。買う側は見た目につられ判断を見失い、価格にとられてます。
- 清潔感、一人ひとり細かく対応していく。
- 丁寧な接客を常に心掛ける。
- 店舗は小さいが一流の製品と味でお客様に提供しています。視点を残して後継者づくりに力をいれたいと思えます。



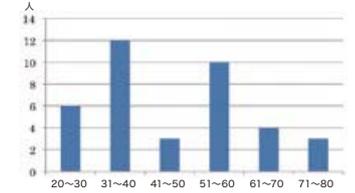
●平岸商店街の概要

平岸商店街は、豊平区の西を南北に貫く平岸街道沿いに、現在の学園前よりさらに南側から、環状線を超え、地下鉄南平岸駅前あたりまでの商店の集積域をさす。振興組合は、北側が平岸中央商店街振興組合、南側が平岸商店街振興組合として組織されている。平岸の歴史と開墾の精神を伝承する事を目指して作られた「平岸天神太鼓保存会」を母体としたYOSAKOIソーランの「平岸天神」などが有名である。

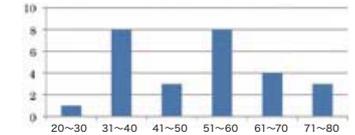


地域サロンびらけしコミュニティスペース

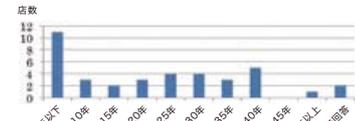
質問1-1 回答者の方の年齢層（歳）



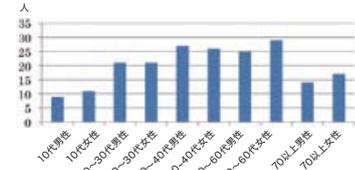
質問1-2 回答者のうち「店主」「社長」「代表」の方の年齢層（歳）



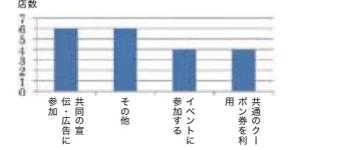
質問1-3 開業してからの年数



質問2 お客さんの年齢層（歳）



質問6 商店街の中で連携して行っていること（複数回答）



浅妻裕ゼミⅡ

ASAZUMA Yutaka Seminar II

参加学生数 12人



研修地・日程 大阪府大阪市・滋賀県彦根市・長浜市

- 10月19日 交通まちづくり市民団体KOALAとの研究会
KOALAとの懇談会
- 10月20日 彦根市にて滋賀県の交通事情に関する研修
(滋賀県立大学湯川先生より)
近江鉄道ミュージアムの見学と豊郷町訪問
長浜市役所訪問、交通政策に関するヒアリング
- 10月21日 あおぞら財団で交通まちづくりに関する研修
あおぞら財団で公害被害者からの体験談を聞く
- 10月22日 帰礼

現場で学ぶ交通まちづくり



浅妻 裕

経済学科
准教授

研修目的

現在、都市の大気汚染問題、空
気汚染問題、高齢化問題などを背景として、公共交通の再編を通じたまちづくりが模索されている。関西ではこの取り組みが活発に行われているため、現地を訪問しヒアリング調査などを行った。

総括

地域研修Ⅱでは、毎年KOALAとの研究交流を行っている。今回、当ゼミからは北海道の乗合バス事情を報告した。いくつかの都市における利用の増減の要因について、また利用促進への取り組み内容について、自分たちなりに整理して紹介した。KOALAからは、バスマップなどの乗合バスの利用促進への取り組み、ドイツの都市交通の事例紹介、阪堺電軌存続問題の現状、の3つの報告があった。貴重な研究交流の場となった。

滋賀県における3つの研修では、大都市圏周辺部という滋賀県の地理的特徴を反映した利用実態や課題があることがわかった。さらに、地域状況を踏まえた利用活性化への取り組みがあることも把握できた。

3日目に研修を行ったあおぞら財団は、自動車排ガス・工場排煙を原因とする公害被害地域である西淀川地区で、公害被害地域の再生に取り組む団体である。具体的には、公害の悲惨な経験を次の世代に伝えるなどの活動を行っている。今回、患者自らの悲惨な経験談を聞くことができたが、どの学生も真剣に聞き入っており、自分たちがなぜこの分野の勉強をする必要があるのか、ということがよく理解されたのではないかなと思う。

学生研修記

【車優先の道路環境と西淀川地区公害訴訟】



工藤大輔

地域経済学科3年
遠軽高校出身

あおぞら財団では、西淀川地区での交通のまちづくり政策や公害訴訟のことなどについて学びました。そして財団周辺の道路環境も視察しました。財団の近くにある歌鳥橋交差点は、横断歩道が無いため歩行者は地下道を通して道路を渡らなければならない、とても不便な道路環境で、車主体の道路整備が象徴されていると感じました。交通量が多く空気も汚れていたことも印象に残っています。公害訴訟については、公害被害者の方から直接お話を聞くことができました。当時の西淀川地区は工場や車などから排出される煙により大気汚染がひどく、それによって喘息が発症し、発作が起こる恐怖に毎日苦しんでいたそうです。公害についての体験を直接聞くことは滅多に無いのでとても貴重な話を聞けたと思います。交通量が多い大阪などの大都市圏では、環境対策にももっと力を入れていく必要があると感じました。

【交通まちづくりの市民団体との交流】



佐藤かおり

地域経済学科3年
静内高校出身

今回、初日のKOALAとの研修の中で、バス利用環境の向上について、知識を深めることができました。例えば、現在多くの都市でバスマップが作成されています。これは、事業者ごとに路線図が異なっていたものを、色使いを工夫することなどにより集約したものです。その他にもバス停環境の向上など、阪神圏での事例を中心に様々な利用活性化への取り組みが行われていることがわかりました。

また、あおぞら財団で、工場や自動車からの大気汚染による被害者の体験談を伺いました。体験した人にしかわからない環境汚染の恐怖、実態などについて知ることができ、さらに、交通のあり方を見直すなどの公害被害地域の再生がいかに難しいかもよくわかりました。そして、今回お話をしてくださった語り部の方には、今後も私たちのような世代に体験談を伝え、活躍して欲しいと思います。

写真キャプション

- 彦根市でレクチャーを受ける。
- 近江鉄道を利用しての移動。
- 近江鉄道でのヒアリングの様子。
- あおぞら財団周辺の幹線道路を視察。



伊藤淑子ゼミⅡ

ITO Yoshiko Seminar II

参加学生数 16人



研修地・日程 美唄市

- 9月27日 宮島沼水鳥・湿地センター、ふゆみずたんぼ見学(市農政部長 政課土屋貴久氏)
JAびばいらいす工房、雪蔵工房見学
ゆーりん館にて米粉講演(榎角屋社長高橋幹夫氏)
- 9月28日 体験工房よーいDONにて米粉調理と試食体験(榎角屋社長高橋幹夫氏)
「すぎうらベーカリー」「山下菓子店」見学
アンテナショップPIPa見学

美唄市にみるコメコを活用したまちづくり



伊藤 淑子

経済学科
教授

研修目的

美唄市では基幹産業である農業新興のために、生産者、消費者、行政、市内諸団体からなる「こめこ研究会」をたちあげ、普及に取り組んできました。実際に取り組んできた方たちとの出会いから、まちづくりの意義を実感する機会をもった。

総括

前期のゼミでは、①美唄市の歴史と現況、②美唄市の農業、③北海道米作農家の一年、④北海道米(飼料米・米粉を含む)の歴史、⑤食糧自給率の変遷と国際比較、⑥食料自給率の問題点と諸政策、⑦6次産業の可能性、⑧日本の減反政策、⑨戸別所得保障制度、⑩海外の直接個別保障制度、⑪米粉生産農家への補助金について、分担して報告した。

また一部の学生は、札幌市内でこめこ生産を行っている(株)ツカモトミルズ、こめこ研究に取り組んでいる札幌東商業高校マーケティング部を訪問し、聞き取りを行った。

9月の2日間の研修では、美唄市コメコ研究会の高橋会長、市内でコメコ製品を生産、販売しているベーカリー、菓子店の店主の方たちから、お話をうかがう機会をもった。また実際に調理体験もでき、貴重な機会ではあったが、積極的な参加という面では課題が残った。

後期には研修の成果を経済学部ゼミナール協議会主催のプレゼンテーション大会に報告、賞を受けることができ、ゼミ生の大きなげみとなった。

学生研修記

【ネットワーク形成の重要性】



植田麻那美

地域経済学科3年
札幌新川高校出身

今回の伊藤ゼミナールⅡの地域研修では、美唄市を訪れました。美唄市は北海道でも有数の米の産地であり、その米を利用した「米粉」の生産による地域の活性化に取り組んでいます。美唄こめこ研究会会長の高橋さんの講演やJA美唄の見学、体験工房よーいDONにて米粉を使った料理体験などを行い、米粉の現状や今後の取り組みなどについて学んできました。

今回の地域研修を通じて私は、美唄市では地域住民が一体となって米粉の普及活動に取り組んでおり、米粉によるネットワークがどんどん広がっていているように感じました。地域を活性化させるためには美唄市のように一体化し、ネットワークを形成することが不可欠なのだと思います。

【美唄市での地域研修を振り返って】



杉本大介

地域経済学科3年
旭川大学高校出身

今回、私の地元である美唄市を訪問し、地域を活性化するためにどのような取り組みをしているのかということ学んできました。美唄市での取り組みの一つとして米粉に注目しており、米粉の需要、供給を増やすことによって農業を守り、さらに地域経済が活性化するように取り組んでいました。美唄市では米粉を使ったパンの製造で有名な「すぎうらベーカリー」や米を利用したお菓子を販売している「山下菓子店」などがあり、米粉が美唄市独自のブランドとして根付きつつあるのかなと感じました。地域研修をきっかけにあまり関心のなかった地元に目を向けることができたのでこの先の動向に注目していきたいと思いました。



写真キャプション

- ① らいす工房。② 宮島沼みずとり湿地センター。
- ③④ うどん作成。⑤こめこうどんの完成。⑥ こめこシフォンケーキ。⑦ 山下菓子店。⑧ すぎうらベーカリーの若社長。



内田和浩ゼミ I

UCHIDA Kazuhiro Seminar I

参加学生数 4 人



研修地・日程 八雲町

- 8月23日 八雲町役場(企画振興課-八雲町の「平成の合併とまちづくりの課題」の概要と質疑)
八雲町公民館(社会教育課-八雲町の「若人のつどいの活動と山車行列によるまちづくり」の概要と質疑)
八雲町公民館(「酪農村・立岩地区の地域活動」-立岩地区酪農家への聞き取り調査)
- 8月24日 八雲町役場熊石総合支所(地域振興課-旧・熊石町の「平成の合併とまちづくりの課題」概要と質疑)
旧・熊石町内の見学及び聞き取り調査(海洋深層水総合交流施設、アワビの養殖施設、「万葉の詩」塩工場、新規就農家のハウス)
山車保管庫の見学及び若人のつどい、山車行列関係者との交流会
- 8月25日 立岩地区内見学(バスにて)、アイスクリーム作り体験(ファームメイド遊楽部館)
八雲ハーバスターで昼食

八雲町における地域づくり



内田 和浩

地域経済学科
教授

研修目的

「八雲町におけるまちづくり」を全体テーマに、実際の自治体における地域づくりへの取り組みに触れることにより、地域づくりにおける「協同」「協働」「連携」の意味や「住民の意欲と主体性の確立」の実態に迫り、地域づくりの実践を実感する機会とする。

総括

前期の内田ゼミナール I では、地域社会の実像-自治と協同・協働の地域づくりをテーマに、築山崇・桂明宏編著『ふつうのむらがあつとき-地域再生への道を探る』(クリエイツかもがわ,2009)をテキストとして、苦難の中で、住民自身の協同と協働の力で自治を生み出そうという地域づくりが、全国各地域で取り組まれていることを学んできた。

地域研修 I では、「平成の大合併」により実質的に八雲町に吸収合併された旧・熊石町の現状と今後のまちづくりの可能性、八雲町の基幹産業である酪農地域である立岩地区の生活実態、の二つを具体的な課題として調査を行った。熊石地区では、人口減や市街地商店街の崩壊等、合併によるマイナス効果が見られる反面、独自の「熊石地域づくりプラン」の策定・実行や熊石総合支所職員の思い、そして新規就農者などの取り組み等を聞くことができた。酪農地域である立岩地区では、酪農青年研究会(酪青研)の若者たちが積極的に地域活動に取り組んでいる様子を知ることができた。

学生たちにとっては、地域社会で暮らす生身の人々と直接出会い、直接話を聞き、直接体験する、とても良い機会になったと思う。

学生研修記

【八雲町を訪ねて】



岩城健太

地域経済学科2年
本別高校出身

今回、私たちは八雲町に地域研修に行き「平成の大合併と今後のまちづくりの可能性」「酪農村の生活実態」というテーマをもとに地域調査を行いました。

合併問題の調査では、八雲町役場と熊石総合支所(旧・熊石町役場)を訪ね、住民の方々の合併に対する思いの違いや合併によって起きた弊害などを聞くことができました。しかしながら、合併を機に互いの地域には豊富な特産物があるため、まちづくりにも新たな可能性が広がると感じました。

また、立岩地区の方々にも実際にお話を聞く機会があり、酪農の大変さを聞いたり、しぼりたての牛乳を飲むこともできたり、普段体験できない貴重な体験をすることができました。

地域研修は、実際に足を運ぶことにより大学の講義ではわからないことも理解でき、新たな考えも生まれてくると思います。町民の方々と交流もでき、とても有意義な地域研修でした。

【札幌を出てから分かったこと】



武部夏生

地域経済学科2年
札幌手稲高校出身

今回、私たち内田ゼミナール I は地域研修で八雲を訪れました。私たちは町役場を訪ねたり、地域青年団体の皆さんとの交流をしたり、酪農、農業などの仕事で毎日を暮らす人々へ聞き取り調査をしてきました。この機会は、私にとって遠く感じていたものに触れることばかりでした。

もともと私は札幌育ちで農山漁村地域に住むことはなく、ずっとそんな地域での暮らしに興味を持って生活してきました。それがこのゼミを選んだ理由でもあります。

この地域研修を終えるまで、私は大学を卒業したらどこかに就職して働くしかない、と思っていました。しかし、私が地域研修で出会ったのは、酪農・農業などをして暮らす人々でした。遠く感じていた仕事で毎日働いて暮らしている人を目の当たりにしたことは、とても新鮮なことでした。地域研修に訪れることで、いろいろなものごとに触られます。きっと視野が広がられるはずです!

写真キャプション

- 1 熊石総合支所にて、萬谷地域振興課長補佐らへの聞き取り調査。
- 2 「万葉の詩」塩工場見学。
- 3 アワビの養殖施設見学。
- 4 ファームメイド遊楽部館にて、アイスクリーム作り体験。



内田和浩ゼミⅡ

UCHIDA Kazuhiro Seminar II

参加学生数 9人



研修地・日程 神奈川県相模原市・千葉県浦安市

- 8月31日 相模原市役所 (①相模原市における「平成の大合併の実態と課題」の説明と質疑-中央区役所地域政策課片野課長・企画市民局企画部広域行政課岩部主幹、②相模原市における「都市農業の現状と課題」説明と質疑-環境経済局経済部農政課菅谷課長)
- 9月1日 相模原市藤野まちづくりセンター (旧・藤野町役場) (①「平成の大合併の実態と課題」の説明と質疑-藤野まちづくりセンター中島所長他、②旧・藤野町役場関係者から聞き取り調査) 相模原市立藤野中央公民館 (旧・藤野町住民から聞き取り調査) 相模原市南区下溝 座間農園 (「都市農業の現状と課題」について経営者である座間宏氏から聞き取り調査) 相模原市立麻溝公民館 (麻溝地区関係者との交流)
- 9月2日 浦安市役所 (浦安市における「観光・リゾートとまちづくり」の説明と質疑-市長公室企画政策課 醍醐課長補佐・市長公室広聴広報課内田広聴係長) 東京ディズニーランド・ディズニーシーを視察

「平成の大合併の実態と課題」「都市農業の現状と課題」「観光・リゾートとまちづくり」



内田 和浩

地域経済学科
教授

研修目的

住民自身の協同と協働の力で自治を生み出そうという地域づくり実践の中で、どのような「学び」によって具体的な地域づくりが創造され、その担い手が形成されているか。神奈川県相模原市・千葉県浦安市を訪ねて具体的な実態に迫っていくことを研修目的とした。

総括

首都圏大都市における「平成の大合併の実態と課題」「都市農業の現状と課題」として神奈川県相模原市を、「観光・リゾートとまちづくり」として千葉県浦安市を訪ねて具体的な実態を調査した。

「平成の大合併の実態と課題」では、旧・藤野町の藤野まちづくりセンターを訪ね、旧・藤野町側からの合併の経緯と問題点を聞くとともに、住民の方々等へのアンケート調査を行い、合併による変化と今後の課題を明らかにしようとした。「都市農業の現状と課題」では、実際に都市農業を営んでいる方から直接聞き取り調査を行い、その現状と問題点を学んだ。「観光・リゾートとまちづくり」では、浦安市役所を訪ねてお話を伺った。当初のイメージとは異なり、「ディズニーランドのある街」から「今後、急速な高齢化や財政難が押し寄せてくる自治体」として浦安市への新たな認識を持つことができた。

北海道とは違う首都圏の自治体を訪問したことにより、学生たちの地域社会・地域づくりに対する興味・関心にも大きな影響を与えたのではないと思う。

学生研修記

【都市農業をこの目で見て】



加藤つばさ

地域経済学科3年
本別高校出身

私は都市農業を想像した時、都市といっても市街地からちょっと離れたところにあるのだろうと思っていた。そこで私たちは実際に相模原市で農業を営んでいる座間さんに話を聞きにいった。座間さんの直売所を訪れ、最初に目にしたものは住宅街のすぐ横にある大きな畑やハウスであった。私が想像していたよりもはるかに近接していたのだ。北海道に住んでいる私は、畑の周りに家など全くなく、広い面積の中で農業が行われているという事が当たり前のように感じていたので、このように実際に住宅と近接している畑を目にした時とても衝撃を受けた。それと同時に北海道とは違った農業のあり方を初めてこの目で実感し、都市で農業を行っていくうえでの様々な困難や苦勞そして何よりその努力が伝わってきた。そして、私はその努力と安全で新鮮な野菜が身近で手に入る事の大切さをもっと住民の方々に実感してほしいと感じた。

【旧藤野町の平成の大合併】



本井翔悟

地域経済学科3年
栗山高校出身

内田ゼミナールⅡでは、それぞれ興味のある内容を挙げ、3つのグループに分かれて事前学習を行い、調査をしました。私のグループが重点を置いた平成の大合併では、1市4町で合併が行われた神奈川県相模原市、そして相模原市と合併した旧藤野町へ行き、合併に至った経緯や合併後の変化、課題などについて聞き取り調査を行ってきました。

この合併に至るまでに行政だけでなく、住民の間で様々な動きがありました。旧藤野町では、住民が合併に対する住民投票条例をつくるために署名を集めた結果、条例が制定され、住民投票が行われた。それにより、町が合併に対して前向きになったという経緯がありました。

今回の地域研修で、行政だけで地域をつくるのではなく、地域を変えたいという積極的な住民の参加によって、地域づくりが行われているということを実感することができました。

写真キャプション

- ① 藤野総合事務所職員へのアンケート調査。
- ② 座間農園での聞き取り。
- ③ 座間農園の見学。
- ④ 麻溝公民館での交流会。



大貝健二ゼミ I

OGAI Kenji Seminar I

参加学生数 6人



研修地・日程 帯広市

9月13日	帯広市役所（商業まちづくり課）中小企業振興基本条例と とかちむら視察 ばんえい競馬場バックヤード見学
9月14日	練ホクコー 十勝産素材にこだわった冷凍ギョウザ開発 街中田食品 十勝産大豆による豆腐の燻製“とうふくん”
9月15日	池田町ブドウ・ブドウ酒研究所

帯広における中小企業振興基本条例と中小企業の取組み



大貝 健二

地域経済学科
講師

研修目的

2007年4月に「帯広市中小企業振興基本条例」が施行された。この条例では、地域経済を支えているのは、地元の中小企業であり、中小企業を支援することによって、地域振興を図ることが目的とされている。本研修の目的は、この条例の策定経緯や、産業振興ビジョンに伴う諸施策の目的を学ぶことである。また、十勝・帯広の中小企業者と、行政や地元大学などの連携によって、十勝産素材を意識した新製品の開発が近年相次いでいる。これらの製品開発の意図や今後の展望を探ること、これが目的の2点目である。

総括

本研修の目的の1つである「帯広市中小企業振興基本条例」については、条例制定により、中小企業者や地方自治体の意識が変化してきているとのことであった。その1つとして、「帯広市の産業振興ビジョン」があるが、この策定に自治体職員だけではなく、中小企業者や農業者も加わっていることに驚きを隠せなかった。また、産業振興ビジョンの成果として、競馬場の敷地内の「とかちむら」があり、2010年8月にオープンしたばかりであるが、ばんえい競馬との相乗効果を狙っていることがわかった。

2日目は、十勝産素材にこだわった新製品の開発を、産学官連携で実現している企業2社を訪ねた。企業訪問から見えてきたことは、食料移出基地としての十勝からの変化、つまり地元産の農畜産物を加工することにより付加価値を加え、販売していく仕組みを作ろうとしていることである。小ロットでしか製品を作ることができないという課題もあるが、この取組みを広げていくことが必要ではないかと考えた。また、北の起業協同組合では、北の屋台が目指していること（コミュニケーションの場）、独立・起業により中心市街地の活性化を図ろうとしていることがわかった。

学生研修記

【帯広地域研修を終えて】



樋口一成

経済学科2年
根室高校出身

私の所属する大貝ゼミは教員1名学生6名で9月13～15日にかけて帯広の地域研修に行った。目的は、帯広が先駆けて導入した中小企業振興基本条例の制定に関するヒアリング調査と、帯広の資源を活用して地域活性化に貢献する企業のヒアリング調査であり、市役所をはじめ6つの企業・団体を訪問した。ヒアリング調査自体私たちは初めてで、なおかつレコーダーを使わず記述のみで記録をとるスタイルだったので、記録をとるのに必死で要所的な確かなコメントができなかったことは非常に残念だった。しかし今回の調査では、一般にインターネットなどに公開されている情報だけでなく、それ以上に苦労した話や成功までの一般には公表できない裏話、企業の成功と政府の援助の絶妙なバランス、さらに企業が法をうまくクリアする工夫や上手く行政を活用する術などを聞くことができてとても有意義なものだった。

【地域活性化を担う中小企業】



大槻翼

地域経済学科2年
札幌東陵高校出身

私たち大貝ゼミナールIは、近年、帯広市で制定された中小企業振興基本条例について知るために、帯広市役所、中小企業へのヒアリング調査を行いました。今回のヒアリング調査で感じたことは、帯広市の中小企業は地元愛がすごいということです。実際に訪問した企業は食品加工が中心でしたが、共通していることとして食材はどれも地元でとれたものを使っているということが分かりました。地域経済の活性化の担い手である中小企業が原材料の価格高騰で経営環境が厳しいということもヒアリングした中で分かり、またそれを乗り越えるためにも帯広畜産大学や商工会議所との連携があることも分かりました。今回の研修で、事前に調べただけでは知ることのできない本音の部分まで聞くことができ、貴重な経験となりました。

写真キャプション

① 条例についてのレクチャー。② 枝豆サラダ麺の試食。③ 「とうふくん」誕生話。④ 北の屋台のモデル。



大貝健二ゼミⅡ

OGAI Kenji Seminar II

参加学生数8人



研修地・日程 倶知安町

10月18日 倶知安町役場
ニセコプロモーションボード
ペンション1軒
11月10日 ヒラフ地区ペンション5軒ヒアリング

観光振興と地域づくり



大貝 健二

地域経済学科
講師

研修目的

近年、北海道内への外国人旅行者の増加が著しい。またヒトの移動だけではなく、ニセコ・倶知安地域には、海外から投資が急増している。

本研修では、外国人旅行者急増における倶知安町の取組みや、海外からの資本投資が地域に及ぼすインパクトを与えているのかを検討する。

総括

本研修では、最初に倶知安町役場を訪問した。ヒラフ地域では、夏と冬がピーク期であるが、外国人が多いのは冬であり、長期滞在をする傾向にあるとのことだった。元々はオーストラリア人を中心だったが、近年ではアジア系旅行者も増加している。また、ニセコプロモーションボードでは、ヨーロッパに向けてもプロモーション活動をしており、フィンランドやイングランドからの旅行者も増加してきている。

外資が投下されているという実態は、花園地区などでは大規模リゾート開発という形で現れているが、ヒラフ地域では、コンドミニアムの急増として現れている。コンドミニアムの場合、ペンションの形のまま運営するケースも多く、見た目では判断できない。

外国人旅行者やコンドミニアムの急増によって、地域がどのように変化してきているのかをペンション経営者に話を聞いたところ、共存共生、もっと日本文化を理解してもらいたいといった旅行者に対する要望や、倶知安町の中でヒラフ地域と市街地との相互理解が不十分だという意見、ペンション街の除雪がコンドミニアムの建設によって困難になってきているといったことが聞かれた。

学生研修記

【リゾート開発の進む倶知安】



能登大地

地域経済学科3年
登別青嶺高校出身

今回、私たち大貝ゼミⅡでは、「観光振興と地域づくり」をテーマに、ここ10年で観光客数が急速に変化しているヒラフ倶知安地域を調査しに行きました。倶知安町役場では、外国人観光客に対する動向や政策、今後の課題についてお話を伺い、それまで調べてきた情報をより明確にすることができました。また、外国人を受け入れるため、プロモーション活動等を行っているが現状ではまだ足りず、今後も目が離せない地域だと感じました。さらに、6か所のペンションでヒアリング調査を行ったことから、宿泊客のリピーターを確保しているところでは、新聞やニュースで見たものほどペンション経営は、厳しいものではないと感じました。今回の調査から、倶知安町役場やペンションでの観光に関する多くの工夫により、今後もリゾート地として発展を続けていく倶知安町に大きな魅力を感じました。

【ニセコの活性化と現状維持を】



広瀬尚耶

地域経済学科3年
札幌西陵高校出身

僕達は2日間に渡り倶知安における外国人観光客の動向を主に調べるため、訪問先となるヒラフ地区のペンション6軒と倶知安町役場にヒアリング調査に行ってきました。倶知安町には多くの外国人が訪れ、中でも豪州・アジア経済好景気と円安により豪州・アジアの来訪者が急増し、外国人によるコンドミニアムの運営がされていた。近年では、リーマンショック以降、国内における観光客・ペンション施設が減少しているのが今の現状であった。この対策として、ニセコプロモーションボードでニセコの魅力の情報発信をし、これから更に外国人と現地人が現在の共生を保っていく必要があると実感しました。この研修を通じてインターネットや新聞などの詳しい情報を入手することは簡単だけど、実際に現地まで足を運びお話を聞いてくるといった貴重な体験のおかげで、ゼミのみんなも自分も一回り成長できたと思っています。

写真キャプション

- ① ペンションの風景。
- ② 経営者へのヒアリング。
- ③ ヒラフ地域のマップ。
- ④ コンドミニアムの一例。



奥田仁ゼミ I・II

OKUDA Hiroshi Seminar I・II

参加学生数 18 人



研修地・日程 室蘭市

9月13日	室蘭市産業振興課
9月14日	A1班...増田工業株式会社、三好製作所室蘭工場 A2班...永澤機械株式会社、ファクター(株)室蘭工場 B1班...ファインクリスタル株式会社、(株)ナップ B2班...ティ・イー・シー(株)、北海道マイヒックス(株) C1班...日本安全事業(株)北海道事業所、ニッテツ北海道制御システム(株) C2班...(株)西野製作所、室蘭テクノセンター
9月15日	新日本製鐵(株)室蘭製鐵所

物づくりの町室蘭と中小企業のネットワーク



奥田 仁

地域経済学科
教授

研修目的

①北海道を代表する工業都市室蘭の歴史を知ること。②現在でも日本有数の大工場を見学し、肌で感ずること。③新たな挑戦を続けている中小企業の活動の状況とネットワークの重要性を認識すること。④企業訪問をつうじて社会人としてのマナーや対話の力を身につけること。⑤調査内容を自ら考えまとめること。⑥共同生活を通じて学生同士の相互理解を深めること。

総括

室蘭市は北海道を代表する工業都市であるが、重厚長大産業の後退から地域経済は困難に直面してきているが、そうした中でも中小企業の活性化とネットワーク化による新しい芽も出てきている。一方、近年一次産業中心の北海道活性化策が脚光を浴びているが、中小企業をふくむ物づくりの重要性が十分認識されていないのではないかと危惧されるところである。

今回の研修では、こうした点について、①については学生たちの事前研究と市産業振興課の方々のレクチャーによって、②については新日本製鐵の工場見学をさせていただき、実りある成果を達成できた。また、③、④、⑤については、事前に市から頂戴した資料を基に6つの班がそれぞれ訪問企業を選択し、自分たちでアポイントをとり、訪問調査を実施するとともに、その成果を取りまとめた。

このような経験は特に2年次の学生にとっては初めての経験で緊張を要するものであったと思われるが、3年次の学生の指導性もあり、貴重な体験となったと考える。

学生研修記

【中小企業の活躍と現状、課題の発見】



山崎 凜

地域経済学科3年
帯広柏葉高校出身

2泊3日の地域研修で私たちは「ものづくりのマチ」室蘭市に行きました。私たちは6グループに分かれ各グループ2社ずつ室蘭市にある企業に訪問し、見学しました。私のグループはメラミン食器や工業用精密プラスチック成型技術を主製品とする(株)三好製作所、製鐵プラントの保有技術を活かした各種プラント配管の製作・据え付けを得意分野としている増田工業(株)に訪問しました。2社とも中小企業であり、大手企業からの受注・下請けが多いのが特徴です。今回の研修で学んだことは、大手企業の影響が大きく、中小企業も独自の技術発展や技術の継承のための若手の人材育成が重要であることが分かりました。これらの課題を克服するとともに、大手企業の景気回復が室蘭市にある中小企業の発展につながると感じました。

【「企業城下町」室蘭を訪問して】



佐藤 博紀

地域経済学科3年
札幌啓成高校出身

今回、私たち奥田ゼミナールでは、地域研修を通して鉄と工業の町である室蘭市を訪れ、市役所や企業を訪問することで、室蘭市の工業の現状などさまざまなことを学ぶことができました。お話を聞いて一番印象に残ったことは、室蘭市は新日鉄室蘭製鐵所や日本製鋼所を中心とした典型的な企業城下町であるということでした。訪問したほとんどの企業がこの2社に関連した事業を行っており、多くの企業の方が「室蘭市の工業の発展には新日鉄と日本製鋼所の発展が必要不可欠である。」とおっしゃっていたことから、室蘭市にとってこの2社はなくてはならないものだということがわかりました。今後はこの2社の発展を軸に、ほかの企業がそれぞれ技術などを向上させて業績を伸ばすことが室蘭市の経済の発展に繋がると感じます。



写真キャプション

① 新日鉄高炉、デカイ。② 自分達だけで企業訪問さあ。③ やさしくていいな説明。④ ヘルメットをかぶってついて行く。⑤ 巨大な工作機械。



北倉公彦ゼミI・II

KITAKURA Tadahiko Seminar I・II

参加学生数 55人



研修地・日程 長沼町

- 9月13日 ホクレン農業体験施設“くるるの杜”見学
道の駅農産物直売所見学
学校給食への取組みについての講演（長沼町教育委員会）
パークゴルフ体験
長沼町職員との交流夕食会
- 9月14日 そば打ち体験・総合保健福祉センター“リフレ”見学
米乾燥貯蔵施設“米の館”見学
“アイスの家”見学

グリーンツーリズム・part 7



北倉 公彦

地域経済学科
教授

研修目的

食と農の距離が遠くなっている現状で、食育も可能なグリーンツーリズムは有効な手段である。グリーンツーリズムを強力に推進している長沼町で、様々な知識を得、体験して食と農業との関わりについて理解を深める。

総括

「グリーンツーリズム」をテーマに地域研修をはじめてから7年目になる。そのプログラム案は3年の女子学生が原案をつくり、趣向をこらして楽しみながら学ぶのが、本ゼミの地域研修の方針である。

今年は、食育を通じたグリーンツーリズムの強化策を考えるため、学校給食での地産地消に積極的に取り組んでいる長沼町教育委員会から話を聞くことにした。

また、今年、北広島市にオープンした“くるるの杜”を見学し、都市住民に農業体験をさせる取組みを学習した。

そば打ち体験では、「馬追手うちそばの会」会員の指導を受けながら、汗を流して作ったそばに舌鼓をうつ姿が印象的であった。

毎年のことながら、町長をはじめ職員の方々との交流夕食会では、今年、採用されたゼミ卒業生も参加してくれ、大学では学べない実社会の経験談を聞くことができた。長沼町の皆様のご支援に感謝する。

学生研修記

【実り多き地域研修】



福居賢

経済学科2年
駒大苫小牧高校出身

最初に訪れた“くるるの杜”は、都市住民に食と農業のつながりを理解してもらうことを目的に、今年、オープンした施設である。札幌からも近く、自分たちが食べている農産物が育つ姿をみたり、農作業や調理・加工体験もでき、親子で楽しみながら学ぶことができる。

また、長沼町の学校給食の話聞き、地域ぐるみで地産地消に取り組むことの重要性を認識することができた。

このほか、“米の館”の見学やそば打ち体験を通じて、食と農業の関わりについて学ぶことができた。また、町長や長沼町の職員の皆さんとジンギスカンを食べながら交流ができたことも、貴重な体験となった。

参加者は大人数であったが、仲間意識を強めることもでき、実り多い地域研修であった。

【長沼町の学校給食への取組み】



佐々木詩織

経済学科2年
札幌北陵高校出身

地域研修の中で強く印象に残ったのは、長沼町の学校給食への取組みである。

長沼町では、学校給食を空腹を満たすためのものだけでなく、望ましい食習慣の形成、食生活を支えている人々への感謝や地産地消への理解を深める場として位置づけている。

具体的には、地場農産物を使用した親子料理教室や食育講演会などにより、食べる人、学校関係者、生産者が連携をとっている。また、弁当箱方式から温かい調理を提供するために食缶方式への変更などに取り組んでいる。

何気なく食べてきた給食であるが、その裏には多くの人達の苦労があることを知った。来年の地域研修では長沼町の給食を食べてみたいと思う。安全でおいしい食料を支えてくれている人々に感謝して食事をしなければならない。

写真キャプション

- 1 ホクレン農業体験施設“くるるの杜”。
- 2 相澤教育長から学校給食について講義を受ける。
- 3 大学での講義よりまじめな受講態度。
- 4 名人の指導によるそば打ち体験、その後は各自で試食。



小坂直人ゼミ I・II

KOSAKA Naoto Seminar I・II

参加学生数 34人



研修地・日程 苫小牧市

10月28日 王子製紙苫小牧工場
トヨタ自動車北海道工場
10月29日 アイヌ民族博物館【白老町】

王子製紙苫小牧工場とトヨタ自動車北海道の比較



小坂 直人

経済学科
教授

研修目的

北海道は農業を別とすれば、石炭業、林業、漁業など資源略奪型の産業を中心に発展してきた歴史がある。紙・パルプ産業はこうした資源を元に北海道で加工生産する目的で立地してきた。他方、加工組立型工業の展開がこれまで一貫して弱い部門とされ、その発展が課題とされてきた。トヨタ自動車北海道は、これを克服する道筋を示してくれるであろうか。両者を比較しながら考えてみたい。

写真キャプション

① 古紙の山。② 200メートル煙突。③ 食事風景。



総括

王子製紙苫小牧工場は、わが国の新聞用紙のおよそ3割を生産する巨大な製紙設備をもつ。エネルギー多消費型産業の代表にふさわしく、工場内発電所の高さ200メートルの煙突の威容に圧倒された。工場立地の理由として、北海道の森林資源は言うまでもないが、千歳川の水力利用による発電所建設が強調されていたのが印象的であった。工場の都合で、新聞紙用の大型抄紙機の運転状況が見られなかったのは残念であるが、印刷紙用の抄紙機でも、十分生産設備の巨大さが実感された。また、われわれの目を引いた物の一つに、工場内に運び込まれている雑誌等の故紙の山である。それぞれ2メートル四方ほどの固まりにくくられているのだが、これがふたたび解体され、溶液に浸され、故紙パルプとなり、再生紙となる工程をみるにつけ、紙がリサイクルの優等生であるという意味が実感された。トヨタ自動車北海道工場はおよそ100万平方メートルの敷地に30万平方メートルの建物をもつ、これまた巨大工場である。従業員は現在約3,200人とのことである。主な生産品は、オートマチックトランスミッションとそれらに必要な歯車等の鍛造部品である。その他アルミホイールもある。工場内は至って清潔で、「油にまみれて」の生産というイメージはない。自動車の最終組み立てラインのような状況とは言えないが、それでも、いわゆる「トヨタシステム」の一端が工場で開催されていることを確認できる。ロボットによる生産システムも一部見学できる。アイシン精機の工場を含め、自動車部品関連の工場が苫小牧で広がりを見せ、その技術水準が上がれば自動車組み立て工場がこの地に展開するのは可能との印象を強くもった。

最終日は、白老アイヌの文化を知る機会としてアイヌ民族博物館を訪問した。内容もさることながら、韓国高校生の団体とアイヌの話と一緒に聞くことになったのは、今日の韓国・日本の関係を考える上でも、貴重な経験となった。

学生研修記

【北海道の産業・工業を実際に見て】



明上 兎士

経済学科2年
熊石高校出身

まず、王子製紙苫小牧工場では、スケールの大きさに驚いた。工場面積は札幌ドームの26個分に相当する広さで、工場内の移動はバス移動であった。工場内に雑誌などの古紙の塊が山のようにあり、これが再び紙として利用されるものかと思いき、リサイクル技術の高さを感じることができた。また、実際に見た印刷用紙抄紙工程では、想像以上の大きさに驚き、完成した紙を見せてもらった。世界最大である新聞用紙生産工程を見たかったが、これだけでも、十分に紙パルプ産業が日本産業の中核に位置することが実感できた。次の、トヨタ自動車北海道工場でも、工場の大きさに驚かされた。製造工程を見て印象的だったのはロボットによる生産システムである。王子、トヨタいずれの工場も、鉄道、道路、港といった交通の利便性の高いところに立地しているのがよく理解できた。

【豊田自動車北海道を見学して】



今野 翔太

経済学科2年
札幌東高校出身

今回、私たち小坂ゼミは、地域研修で豊田自動車を見学した。ここでは、オートマチックトランスミッション・CVT・4WDトランスファーを作成していた。車が好きな私にはとても興味のある研修であった。直接研修内容とは関係ないのかもしれないが、車本体を作っていたわけではないが、この北海道工場のような、部品を作成する工場が豊田自動車という、大きな工場を影で支えているんだと思うと、大企業のもつ影響というのは計りしれないと感じた。もし大企業が倒産すると、その下請けの企業で働く人々も一気に職を失うことになるのか、などということも考えさせられた。

また、これだけ機械が多く使用される工場だと、環境に多くの公害をもたらすものかと思っていたが、環境に与える影響なども考慮し、リサイクル率が90%を超えると聞いた時は、驚いた。

直接、この会社で働く働かないを別にしても、今後の自分にとってもプラスになる研修となった。

小田清ゼミ I・II

KODA Kiyoshi Seminar I・II

参加学生数 29人



研修地・日程 栗山町

9月21日	コココーラ環境ハウス (旧・雨煙別小学校) カルチャープラザ EKI 環境センター (生ゴミの堆肥化等リサイクルセンター)
9月22日	ハサンベツ地区・里山づくり体験学習 小林酒造・北の錦記念館

栗山町～環境を育むまちづくりの実践に学ぶ



小田 清

地域経済学科
教授

研修目的

栗山町は地理的条件に恵まれ発展してきた地域である。まちづくりの特徴は「自然・文化・産業の連携」にあり、特に自然環境重視を謳って地域づくりを行っている。

本研修ではこの「環境重視のまちづくり」を実体験し、地域から学ぶことにおいた。

総括

栗山は、1881(明治21)年に宮城県角田藩士が入植し開墾したことに始まる。当時は角田村と称していたが、1949年に現町名となった。地理的条件は、札幌市や苫小牧市、新千歳空港から1時間圏内と比較的恵まれている。中心産業は米や野菜栽培等の農業であるが、酒造業や製材・加工業、製菓業等も盛んで、近年では国蝶オオムラサキや坂本九思い出記念館、北の錦記念館など、観光地としても知名度を増してきている。

順調に発展してきた栗山町も一次産業の停滞や建築業の倒産等もあり、人口減少に悩んでいる。しかし、逆に地域資源(人・文化・モノ・環境)を活かしたまちづくりを基本に据えた総合計画を策定し、将来に備えている。特に耕作放棄地を、以前にそうであった「里山」として再生させる地域的な取り組みは注目を集めている。

本研修では地域ぐるみの「里山づくり」に額に汗して参加することと、自然環境の保全なしには地域経済や社会生活が成り立たないことを実感することに目標を置いた。初めての経験なので完全理解とはいかないが、次年度での研修の課題は明確になったかと思う。

学生研修記

【地域資源を活かしたまちづくりに学んで】



加藤 拓晃

地域経済学科2年
札幌第一高校出身

1日目・午前中は役場・経営企画課地域政策グループによる「まちづくりの取り組み」についての講話があり、過疎化が進む中での地域資源を活かし、地域に根ざしたまちづくりについて学ぶことができました。

午後からの施設見学では、生ゴミの堆肥化等リサイクルに取り組んでいる「環境センター」を訪問、町内のゴミ回収は16分別と聞かされ、驚かされました。

2日目の小林酒造では、本学部のOBでもある社長から学生時代の話や若者への期待などが熱く語られました。特に地場産米を使った日本酒づくりへの思いや初めてみる日本酒の製造道具や機械類、初めて聞く工程の説明は新鮮でした。

今回の研修では、地域経済やまちづくりの重要性について深く学ぶことができ、とても充実したものでした。

【「栗山町と共に！」町民が生んだ価値と誇りに学ぶ】



大久保 亮

地域経済学科3年
長沼高校出身

今回の研修では「まちづくりの取り組み」の一環として、里山の再生を目指す「ハサンベツ」と、栗山の発展と共に歩んできた老舗「小林酒造」で学びました。

ハサンベツ地域では、耕作放棄地で荒れた農地・山林を地域住民や町役場等が一体となって「里山再生」を目指す活動を、実際に体験しました。大変な作業とともに、活性化にける熱い思いを感じました。

創業132年の小林酒造では、本学の大先輩である小林米孝社長から、多くの苦難を乗り越えて培ってきた伝統と「現状に満足しない挑戦の行動を怠ることなかれ」の改革の精神を学びました。

研修の成果は、住民が率先してまちづくりに参画できる仕組みの重要性と自ら考え行動することが住民の誇りに繋がっているということを実感したことです。

写真キャプション

① 額に汗して里山づくり。② 経営企画課・石森氏のプレゼン。③ 小林酒造・工場内。④ 小林酒造社長の講話。



佐藤信ゼミⅡ

SATO Makoto Seminar II

参加学生数9人



研修地・日程 下川町

10月24日 出発
下川町内へ移動
「森の生活」体験の森にて枝打ち体験、間伐体験
森のなかヨックルにて手作り夕食
10月25日 マイ箸づくり
うどん・そば打ち体験
帰礼

下川町の地域資源を活かした地域づくり



佐藤 信

地域経済学科
教授

研修目的

下川町では、町面積の9割以上を占める森林資源を活かした様々な取り組みが見られる。研修では、下川町を拠点とするNPO法人の活動を学ぶとともに、森林に入り枝打ち体験などを行った。また、マイ箸づくりや手打ちうどん・そばづくりにも挑戦した。

総括

今回の研修は、上川管内下川町を訪問した。下川町は、激しい過疎化が進行する中で、森林資源を活かした取り組みを行政と森林組合が協力して進めてきている。また、若い人たちが移住して、新産業を起こす取り組みも見られる。

研修の初日には、NPO法人「森の生活」の奈須代表の指導の下、森林の中に入り、北方圏の森林の特徴についてレクチャーを受け、次いで間伐や枝打ちの体験を行った。NPO法人の事務所は、下川スキー場のロッジにあるが、そこでも質疑応答を行った。その夜は、森のなかヨックルという宿泊施設（この管理者もNPO法人が担っている）を利用し、町内で食材料を購入し、鍋料理を作った。翌日は、町内の工房「木子精」（きのこころ）主宰者である近藤正治氏の指導の下で、八角形の「マイ箸」づくりを行った。久しぶりにカンナを手にした学生も多かったようである。また、地元産小麦粉とそば粉を使った、手打ちそば、手打ちうどんにも挑戦した。

ゼミナールⅡでは、大学内では経験できない体験をすること、地域資源を活かすまちづくりを学ぶことを狙いとしたが、ゼミ生にとって良い体験となったと思う。

学生研修記

【森林という資源に触れ学んだこと】



金井大海

経済学科3年
北見柏陽高校出身

私たちは、今回の地域研修で下川町に行きNPO法人森の生活にお世話になり、いろいろな活動やお話を聞いてきました。その中で印象的だったのは、森という資源を使った様々な取り組みでした。札幌に住んでいると、森に触れる機会がほとんどないため、森に実際に入り木を切ったりしたことは、とても新鮮でした。今回は体験することはできませんでしたが、木の葉っぱを使いエッセンシャルオイルを作ったり、アロマオイルを作ったりする体験もできるようです。ほかには、五味温泉では、木の枝を使い木質バイオマスエネルギーとしてエネルギー供給をしていました。

二日目には、下川町の小麦粉とそば粉をつかったうどんとそばを打ち、また木をつかったマイ箸作りをしました。これらすべてにおいて、地域資源の活用がなされていることに驚き、このような取り組みが、今必要とされているものではないかと思いました。

【森林資源を活用した内発的発展の取り組み】



濱谷大地

地域経済学科3年
寿都高校出身

佐藤ゼミは道北の下川町へ2日間のスケジュールで地域研修を行いました。下川町は全体の約9割が森林で囲まれているため、その森林資源を活かした事業型NPO法人である「森の生活」の活動を調査するとともに、マイ箸づくりやそば打ち体験をしてきました。

「森の生活」では、訪問者に森林体験を行い下川町の環境保全の方法をレクチャーし、またトドマツの枝葉抽出したエッセンシャルオイルを販売するなど、活動は多岐に渡ります。事業型NPO法人は、町の環境資源を最大限に生かし、アピール・活動をすることで、地域の活性化を図る、重要な組織であることが分かりました。

今回の研修は、短期間でしたが、非常に多くのことを学ぶことができました。過疎が進む地域では、一人ひとりの住民の意識と意欲が大切であることをこの地域研修で感じました。

写真キャプション

① 間伐体験。② 枝打ち体験。③ マイ箸づくり体験。④ 手打ちそば・うどん体験。



徐涛ゼミ I・II

JO Tou Seminar I・II

参加学生数 12人



研修地・日程 芦別市・札幌市

8月9日 株式会社北日本精機
8月10日 札幌商工会議所

北海道企業の中国進出と北海道の中国観光客誘致



徐 涛

地域経済学科
教授

研修目的

株式会社北日本精機と札幌商工会議所の訪問・調査を通じて、日本企業の中国進出における課題と対策を検討し、中国観光客誘致の現状を把握し、北海道の地域振興の場合、中国ファクターをどう活用するのかを考えてみた。

写真キャプション

① 北日本精機・小林社長の会社紹介。② 生産ライン見学。③ 北日本精機事業紹介。④ 北日本精機質疑学生。



総 括

今回の地域研修は、資料調査、聞き取り調査ならびに見学を通じて、日本企業の中国進出の経緯、目的、現状ならびに日本の地域経済に与える影響を詳しく調査し、北海道の中国観光客誘致の現状、問題点と対策を調べた。

北日本精機は、中国上海市に子会社を設立し、海外進出を加速している。世界シェアが高いグローバル企業であり、北海道の元気企業である。中国の安価な熟練労働者を活用し、また最新の設備を導入することによって、中国市場の獲得とグローバル生産拠点の構築を順調に進めてきた。北日本精機は、ほかの日系企業と異なり、芦別で長期間にわたって育てた中国人幹部を経営責任者として中国子会社に出向させ、経営を任せたと、海外で事業を展開しながらも、国内で投資を拡大していることは、非常に印象的であった。

札幌商工会議所では、中国人観光客の誘致の現状と課題を調査した。近年、中国人裕福層が拡大し、中国人観光ビザ政策が改正された結果、中国人観光客が大きく伸びている。とりわけ中国映画ロケ地としてよく登場した北海道の人気は、高まっている。しかし、北海道の自然、物産などの魅力は、まだ中国人に伝わらない部分が多い。北海道観光はサービスの面やインフラの面においてまだ改善されるべき点が多い、と指摘されている。

学 生 研 修 記

【ともに北海道を良くしよう！】



鈴木大介

地域経済学科2年
石狩南高校出身

商工会議所では、『商工会議所とは何か？』ということを学ぶとともに、『北海道経済をどうやって良くしていくのか？』という大きなテーマについて、商工会議所の方にお話してもらいました。

札幌商工会議所は全国規模のネットワークを形成して経済活動を行っており経営相談や研修会をはじめとした場を設け北海道経済の発展へ大きく貢献していることを知りました。

また、北海道経済に関して熱く語っていただき、我々にも『どうやって北海道経済を良くするのかについて具体的な意見はないか？』と質問を聞くなど、札幌商工会議所の方々の北海道経済に対する真摯な姿勢が伝わりました。

今回の地域研修では、北海道経済の最前線で戦っている人たちの話を聞くという非常に意義のある体験をすることができたので、これからのゼミや学習に生かしていきたいと思えます。

【交通まちづくりの市民団体との交流】



三森頌子

地域経済学科3年
島根県大田高校出身

今回、北日本精機に訪問させていただき、中国における日本企業の中国人雇用などの現状や問題点についてより理解を深めることができました。

北日本精機では、中国式の経営と日本式の経営の違いも、日本の大学出身の中国人を経営者とする事でクリアしたそうです。これも、上海の工場は中国の会社であるから中国式の経営を行うべきであり、古い習慣を捨てて中国の次の世代に責任を持つべきという小林社長のお考えです。現在の中国人の賃金問題の解決案としても、現地の中国人の待遇やその賃金を上げることで、企業の質を高め、そしてゆくゆくは仕事のできる中国人を日本へ呼び込むことで日本の景気を上げることに繋げようとしていました。

この地域研修では日本と中国の関係についてニュース等で取り上げられている面だけではない、貴重な意見を聞くことができ、より深い理解を得ることが出来ました。

高原一隆ゼミⅠ・Ⅱ

TAKAHARA Kazutaka Seminar I・II

参加学生数 20人



研修地・日程 江別市・下川町

8月16日 下川町（ふるさと開発振興公社）
佐藤農場
パン屋「美花夢」（びかむ）
8月17日 下川町クラスター推進部
8月18日 道立食品加工研究センター
江別製粉㈱
農業法人 輝楽里（きらり）
アンケート活動

地元産品の地域ブランド化のための経済ネットワーク



高原 一隆

地域経済学科
教授

研修目的

第一に、地元産の農産物をめぐる地域組織間ネットワークをすすめている地域の実態をフィールドワークすること、第二に、それと連携して地域振興をすすめている地域のフィールドワークをすること、第三に、それらを統計数字と照らし合わせることによって、地域を総合的に把握することの重要性を学ぶ。

総括

江別市ではブランド性の高い特殊な小麦とその製品づくりを通して経済ネットワークが形成されつつあり、このネットワークが地域のパフォーマンスを盛り上げ、独特の地域づくりと密接に結びついている。フィールドワークにより、こうしたネットワークの一端を実感することが出来た。

下川町は1980年代から粘り強く独特の地域づくりをすすめ、全国的にも注目を浴びている地域である。今回は江別の小麦ネットワークとの連携に焦点を当て、江別から学んだ地元産小麦を活用した経済ベースの地域づくり活動のフィールドワークを行った。それらを通して、地域づくりが極めて多様性をもっていることを学ぶことができた。

また、こうした地元産小麦のネットワークを通じた活動が一般市民にどれくらい浸透しているかについては、当事者も模索中であるため、我々が独自に江別の数カ所に分散して、小麦ネットワークの認知度アンケートを行った。その結果、当事者の予想を超えて、地元産小麦ネットワークの活動に対する高い認知度を実証することが出来、地域づくりの活動に対して、一定の貢献をすることが出来た。

学生研修記

【新たな地域間連携の形成】



伊豆勇毅

地域経済学科2年
札幌東陵高校出身

私たちは今回、江別市と下川町の2つの街で地域研修を行いました。講義の地域経済論Ⅰ・Ⅱの内容でも取り上げられている地域の産業、地域ブランドや地域間ネットワークに焦点をあて、地域がどのような状態なのか、何が求められているのかを学んできました。江別市と下川町のハルユタカという地域ブランド小麦から生まれる地域間の農家の人々と役員の方々との間で生まれる産業間の連携や、産業間の垣根を越えて生まれる、新しい特色のある新商品の開発現場等を実際に自分たちの目で確かめてきました。江別市では私たち自身、先輩方に見習いながら精一杯頑張って、地域周辺の住民方にアンケートなどを行いながら、実際の声を聞いて回りました。地域研修では、ひとりひとりがやらなければならない事も多くなりますが、その分得られる充実感も多く、また他のゼミ生やゼミⅡの先輩、高原先生とのつながりも深くなったため、大変有意義な地域研修になりました。

【地域ブランドとつながり】



廣川和貴

経済学科3年
稚内大谷高校出身

私たちは、幻の小麦ハルユタカ・江別産小麦は地域ブランドとして確立していること、また、地域活性化には行政でなく個人ひとりひとりがどのようにして地域に貢献するか、どんな考えを持って生活し、その地域を支えているかが大事であることを学びました。

研修では、生産から消費までの流れを追跡し、農家は作りにくいハルユタカに挑戦し、製粉会社は小規模生産にも対応できるシステムをみだし、安定供給が見込まれない小麦をこだわって使うパン屋など単に利益をあげるためならやらない方が良いモノを協調・連携しあって作ることによって、高付加価値でおいしく、地域に愛されている地域ブランドとして成り立っていることを実感しました。

実際に地域に出ていくことにより、本や論文だけでは知り得ないことを肌で感じ、とても有意義な研修となりました。

写真キャプション

① 下川町ヒアリング。② 美花夢（びかむ）ヒアリング。③ そうめんの製麺風景。④ 農業法人輝楽里（きらり）でのヒアリング。



西村宣彦ゼミI・II

NISHIMURA Nobuhiko Seminar I・II

参加学生数 28人



研修地・日程 夕張市

- 8月30日 夕張市役所ヒアリング（藤倉市長、寺江総務課長ら）
夕張国際ファンタスティック映画祭ディレクター・澤田直矢氏ヒアリング
青木隆夫元館長のガイドによる石炭博物館視察
夜ミーティング
- 9月1日 夕張市民ヒアリング（夕張再生市民会議の皆さん、読み聞かせボランティアひなたぼっこの皆さん、(医)夕張希望の杜職員、(福)清光園職員、(株)ネクスト夕張、夕張桜プロジェクト、夕張観光協会、年金者組合、メロン農家、夕張市民ネットの皆さん）
「石炭の歴史村」内施設でジンギスカン後、ミーティング
- 9月2日 市民ヒアリング（夕張再生市民会議の皆さん、浜松市から派遣中の夕張市職員、南部ふれあいサロンボランティア、夕張市民ネットの皆さん）
企業ヒアリング（トベックス社長・戸部勇司氏、夕張リゾート社長・西田東利氏）

財政再生団体・夕張市～再生への息吹を探る～



西村 宣彦

地域経済学
准教授

研修目的

夕張市は2007年3月に財政再生団体に移行し、10年3月には新法制に基づく財政再生団体となった。赤字を解消しつつ地域再生に取り組む市幹部、草の根から地域活性化・コミュニティ再生・市民自治の実践に取り組む市民や経営者にインタビューし、地域再生への息吹を探った。

総括

夕張市に到着後、まず市役所で藤倉市長の講話を聞いた。続いて市職員からのレクチャー、財政破たんから4年を経た現時点での行政課題（市営住宅の再編・集約化、行政執行体制の維持…）について話を聞いた。その後、夕張国際ファンタスティック映画祭フェスティバルディレクターの澤田直矢さんを皮切りに、20数名に及ぶ夕張市民・企業経営者から、「夕張はどんなまちか」、「破たん前と破たん後の変化」、「自らが取り組んでいる地域活動」、「今後のまちづくりの方向性」などについて、それぞれの視点から考えや思いを伺った。行政の体質や地域医療のあり方など、市民の間で見解の分かれる点もあったが、それ以上に共通していたのは、夕張をよりよくしたいという思いと、夕張のまち、自然、まちで暮らす人々への愛情であった。事後学習では、グループワークを通じてヒアリング結果の質的分析を行った。試行錯誤の結果、学生たちは「今後のまちづくりの方向性」として、①明るく前向きで、お金がなくても温かい夕張をつくる、②美しい自然を生かした夕張をつくる、③介護福祉・訪問診療が進んだ夕張をつくる、④住民と行政が協力し、議論の場が確立された夕張をつくる、の4つに集約した。

学生研修記

【財政破綻から3年経った夕張】



佐藤 夕佳

地域経済学科2年
札幌第一高校出身

夕張で研修を受けた一番の印象は、決して良いとは言えない状況の中で前向きに努力している人が多いということです。実際に夕張を訪れて、市民や市役所、企業の方々直接向話をうかがうことで、事前学習の時とは違う印象を受けたり驚いたりするといったことがありました。数か所でお話をうかがった際に、人によって行政に対する考えが違ったり、まちづくりに対し温度差を感じたりしたということもありましたが、共通して言えることは夕張が好きだということです。自分たちの地元に対する愛情がどの方からも伝わってきました。今回、夕張で研修を行い財政の状況など厳しい現状も見えましたが、これからの夕張の前向きな展望もたくさん見ることができました。市役所・企業・市民の方々に直接色々なお話をうかがうことができ、とても貴重な体験ができた研修でした。

【夕張に行って】



武田 延大

地域経済学科3年
旭川西高校出身

夕張市は財政破綻し353億円という負債を抱えることになりました。財政再生に向けて、夕張市の行政・市民がどのような取り組みや思いを抱えているのか、お話を聞き、将来の夕張にどのような可能性があるかを考えるのが目的でした。私がお話を聞いたのは市長や市職員、医療関係者、介護職員、映画祭ディレクター、町内会長の方、再生市民会議のメンバーなど多方面の方々でした。様々なお話を聞いた全体の感想として、多くの市民が人口流出と高齢化が進む中で残りの負債を返すのは困難と感じていること、市民と行政の間で十分な信頼関係が築けておらず、まちの再生の取り組みが阻害されていることを感じました。市民が積極的に動いていたのが印象的で、行政がもっと積極的に市民の方に歩み寄れば、夕張はもっと変わるだろうと感じました。将来は介護福祉や訪問診療で注目されるまちになって欲しいと思います。

写真キャプション

- ① 映画祭メイン会場で澤田直矢さんヒアリング。
- ② メロン農家でYH経営の森元さんヒアリング。
- ③ 日本国内で唯一の炭鉱抗道体験に出發。④ 南部地区ふれあいサロンの皆さんヒアリング。



平野研ゼミI・II

HIRANO Ken Seminar I・II

参加学生数3人



研修地・日程 札幌市

8月18日 札幌市国際交流センター（市議会議員聞き取り調査）
8月19日 市議会議員聞き取り調査
9月15日 アンケート用紙発送

国際貢献に関する札幌市議会議員の意識調査



平野 研

地域経済学科
准教授

研修目的

国際協力と国際都市・札幌を目指す「札幌市国際化プラン」に見られるように、CSR活動やフェアトレード活動などの国際貢献に関する社会的要請は高まりつつある。本研修の目的は、自治体-企業-市民の連携の現状と課題を札幌市議会議員の意識調査から探ることにある。

総括

本研修では札幌市議会議員の協力を得て聞き取り調査を行った上で、国際貢献の意識調査アンケートを作成し、全市議会議員へ調査協力をお願いした。これを通じて札幌市の国際貢献の課題がみえてきた。将来的な国際貢献の必要性を感じている議員は多いが、一方で財政的問題から積極的な政策に関しては消極的にならざるを得ないという意識も強い。また、議員個人では企業のCSR活動や市民のフェアトレードなどに対して十分な情報を得にくいという側面も明らかになった。このような点から、自治体、企業、市民活動の相互の情報交換や積極的なアプローチによっては、小規模からでもスタートできる国際貢献の可能性があると感じた。小規模予算で経済的成果や新たな観光資源を計っていくという意味では札幌市での国際貢献活動の可能性は大きいと言える。

本調査での成果を受けて、12月に開催されたインターゼミナール大会にて、今後の日本における経済政策の可能性の一つとして、自治体・企業・市民活動の連携による国際貢献活動を取りあげ、可能性と課題について報告した。そこでの議論を通じて、三者の連携をつなぐものとして、学生の活動が果たす可能性というものについても考えさせられた。

学生研修記

【国際貢献の発展・自分の発展】



下村 渉

地域経済学科3年
札幌平岸高校出身

グローバル化が進む昨今で、単にボランティア的な意味合いの国際貢献ではなく、経済的・社会的に持続的発展が可能な国際貢献を実現するためには行政・民間・企業の密な連携が必要であるという議論についてゼミで学びました。そして今回の調査では、まず普段直接お話を伺うことが難しい札幌市議会議員に「国際貢献に対する意識調査」を実施しました。

アンケートは聞き取り調査と調査票調査を行いました。財源の問題や市民の理解など国際貢献に対する議員の生の意見を聞けたのはとても参考になりました。また調査票調査では平野ゼミとして取り組んだ途上国と先進国の搾取的貿易を是正しようとする「フェアトレード」活動や企業の社会的責任と呼ばれるCSRなどが意外に認知度が低いことなどが明らかになりました。

このようなゼミ活動、地域研修を通して一大学生として自主的な学習、社会情勢の理解が自分の成長を促進させると感じた地域研修でした。

【市民を思う議員】



吉崎 涼太

経済学科3年
札幌平岸高校出身

今回、研修テーマの下、札幌市議会議員の方々に聞き取り・アンケート調査を実施して、市議会議員の方々がどれほど私たち市民を大切に考えながら、政策等に取り組んでくださっていたのかが、声もしくは文から感じる事が出来ました。しかし、今回僕たちが提案した「経済的国際貢献」・「札幌市の国際化」の考えに、良い印象を持っていただいた市議の方もいらっしゃったのですが、「今の市民の生活を考えると取り掛かることはできない」等の、良いと思ってくださっても、逆に市民が悩みたいものになっていて、自分の実現したい事と、市民の間で板ばさみになっている市議の方々の苦勞を感じました。多分このような状況では本当に良いものは生まれえないと思うし、私達市民が市議への見方を少し変えなければいけないのではないかと感じました。

写真キャプション

①②③④ 市議会議員インタビュー。



古林英一ゼミ

FURUBAYASHI Eiichi Seminar I

参加学生数 15人



研修地・日程 標津町

9月13日	標津町サーモン科学館で標津町役場熊谷純郎氏による「標津町におけるサケの生産・加工・流通」
9月14日	マ印神内商店で水産加工実習 サーモン科学館においてサケの人工授精実習と、市村政樹氏による講義「サケの生態」
9月15日	サケ定置漁業体験乗船実習

サケを中心とする地域産業の形成



古林 英一

地域経済学科
教授

研修目的

サケは北海道の水産業にとって最も重要な魚種である。単に漁獲量が大きだけでなく、水産加工業が幅広く成立しているため、産業としての広がり大きい。このサケのふ化・放流から漁獲・加工・流通までを実際に体験することでサケ産業を理解することが目的である。

総括

サケ漁業は「つくる漁業」の優等生ともいわれ、人工授精からはじまり、安定した漁獲量を維持し続けている。また、標津町ではかつて近隣の水産加工場で発生したO157事件を契機として、漁獲から加工・輸送に至るまでの衛生管理を地域ぐるみでおこなう地域HACCPを導入している。

本研修ではふだん深く意識することなく消費しているサケの生産・加工・流通の現場を実際に体験することで、水産業を単なる知識ではなく実体的に理解することができたと思われる。

学生研修記

【わたしたちに身近な生命との出会い】



西村巧慎

地域経済学科2年
釧路明輝高校出身

私達は9月に標津へ研修に向かいました。研修の目的はサケ漁について学ぶというものでした。私達はまず「標津サーモン科学館」というサケの水族館で、様々な講義を受けたり体験学習を行いました。中でも、サケの人工授精体験は貴重な体験となりました。撲殺したサケの雄と雌から、精子と卵(イクラ)を取り出し受精させました。サケの生と死を目の当たりにして、生命の重さを実感しました。また、標津の加工場では塩イクラの生産を手伝わせていただいたり、サケの定置網漁に同行し実際に網を引かせていただきました。標津では、地域HACCPと呼ばれる取り組みを行っており、町ぐるみとなって食の安全を守っていました。食の安全をまず自分たちから始めようという姿勢は、とても勉強になりました。環境を守ることはそこに生きる命を守ること、このような考えがもっと広く波及してくべきだと思いました。

【標津町の地域HACCP】



柴田直俊

経済学科3年
滝川西高校出身

古林ゼミでは漁業が盛んな標津で二泊三日の地域研修を行いました。今回の研修で印象に残っているのは標津が取り組んでいる地域HACCPについて学び、実際に鮭の加工場や漁港を見学させていただいたことです。標津町の漁港はカラスが近寄れない工夫がされており他の漁港に比べゴミがなくとても衛生的だというイメージを持ちました。そして水揚げされた魚を大量の氷水に入れ鮮度を保っていました。またイクラの加工場でも毎回除菌殺菌を行い工場内、作業者に清潔でした。

これらは私たち消費者に安心、安全に食品を提供するための取り組みですが、まだまだ全国的なものではありません。まずこのHACCPが世間にもっと広く知られることが必要だと感じました。

写真キャプション

- 1 採卵。
- 2 いくら製造実習。
- 3 製品箱つめ。
- 4 乗船前。
- 5 出港。
- 6 下船後。
- 7 サーモン科学館にて。



古林英一ゼミⅡ

FURUBAYASHI Eiichi Seminar II

参加学生数 9人



研修地・日程 新ひだか町・様似町・浦河町・日高町

9月21日 北海道市場（新ひだか町）の施設見学および軽種馬生産に関するレクチャー、ライディングヒルズ静内（新ひだか町）で乗馬実習
9月22日 日本中央競馬会日高育成牧場（浦河町）で馬の育成に関するレクチャーと施設見学
高村牧場で牧場作業の体験実習（様似町）
門別競馬場（日高町）でレースおよび施設見学

軽種馬の生産・育成・流通および利用



古林 英一

地域経済学科
教授

研修目的

サラブレッドの生産・育成は北海道日高地区の基幹的な地場産業である。本研修においてはサラブレッドの生産・育成・流通の諸段階を体験・見学し、当該産業の理解を深めることを目的とする。

総括

わが国は世界有数のサラブレッド生産大国であり、日高地方はわが国のサラブレッド生産の中心となっている。今回の実習では市場施設の見学とサラブレッド生産のレクチャーを受けた。その後、乗馬施設において乗馬実習おこなった。日本中央競馬会日高育成牧場で、サラブレッドの育成に関するレクチャーを受けた後、高度な科学的育成の現場を見学した。わが国のサラブレッド生産は家族労作的な牧場が中心となっている。様似町の高村牧場でサラブレッドの日常的な飼養管理を実際に体験した。最後に門別競馬場で開催中の道営ホッカイドウ競馬のレースと施設の見学をおこなった。

馬に初めて触れた学生がほとんどであり、本研修を通じて、華やかな競馬場でのレースを支えるために、数多くの人たちの多大な労働が投入されており、それらが地域産業として成立していることを理解できたと思われる。

学生研修記

【馬産地 日高】



新村由香

地域経済学科3年
釧路北陽高校出身

私たち古林ゼミⅡは、馬産地で有名な日高支庁を訪れました。1日目は、実際に競走馬のセリ場を見学し、セリの仕組みなどの説明をうけました。ライディングヒルズ静内では、乗馬を体験し、馬と触れ合うことができました。間近でみる馬は、大きくて最初は恐怖心がありましたが、よく見ると目はくりくりして愛らしく思いました。2日目は、JRA日高育成牧場で競走馬になるための訓練の様子や施設を見学しました。次に、高村牧場で馬小屋の掃除を体験し、馬を育てることの大変さとご夫婦の馬に対する愛情を感じました。最後に、門別競馬場で競馬を見学しました。高村牧場で育った馬が出走し、優勝した瞬間はゼミ生全員が興奮しました。

今回の研修で、馬の生産・流通・利用の過程を目でみて体験したことで、以前より馬がかわいく思えたり、日高出身の競走馬が活躍するところを見てみたいと思いました。

【サラブレッドの生産・流通】



小野田梓

地域経済学科3年
苫小牧東高校出身

私達は日高に行き、馬の生産、流通、利用の現場を直接目で見て体で体験することで学んできました。馬小屋の掃除体験をさせていただいた高村牧場では、優秀な馬を生産するための育て方を学ぶことができました。また、乗馬体験では馬との信頼関係の大切さを学ぶことができました。

この研修以来私は競馬を見ると、その裏に隠された様々なドラマを想像してしまうようになりました。

写真キャプション

- ① 優勝馬記念撮影。② 乗馬研修。③ ひき馬。
- ④ 給飼作業。⑤ きゅう舎掃除。



水野邦彦ゼミⅠ・Ⅱ

MIZUNO Kunihiko Seminar I・II

参加学生数 20人



研修地・日程 当別町・月形町・沼田町

8月17日 当別町 劉連仁生還記念慰霊碑
月形町 月形墓地
月形町 樺戸博物館
沼田町 郷土資料館
沼田町 ほたるの里学習館
8月18日 ホロピリ湖

朝鮮人強制労働および囚人労働の跡地を訪ねる



水野 邦彦

地域経済学科
教授

研修目的

北海道ではかつて朝鮮人が徴用され、炭鉱や飛行場建設できびしい監視のもとに過酷な労働を強いられた。そこでの朝鮮人犠牲者はなお正確には把握されておらず、いまだ遺族に返還されていない遺骨も少なくない。2010年度は、2つの大きな炭鉱があった沼田町を訪ねた。

総括

空知の歴史を掘り起こし、遺骨発掘も手掛けている空知民衆史講座の協力を得て、ゼミでは沼田町の炭鉱を中心に、朝鮮人強制労働および囚人労働の実態を学んだ。まず元拓殖短大の小野寺正巳先生と、深川市一乗寺の殿平真副住職を、7月にゼミにお招きし、事前学習として講義を受けた。お二方は膨大な資料をご用意くださり、あまり知られていない北海道近代史の裏面を概説くださった。

そのうえでゼミ一行は8月に沼田町に向かうが、途中で当別町の「劉連仁生還記念慰霊碑」、かつての囚人労働の犠牲者たちが眠る月形墓地、旧樺戸集治監の建物を生かした月形樺戸博物館に立ち寄った。国道275号線や12号線には囚人労働によって建設された部分があることを一行は学んだ。そのち一行は沼田町郷土資料館やほたるの里学習館で、橋場守町議に、体験にもとづく炭鉱労働その他の興味深いお話を伺った。

翌日はホロピリ湖を展望台から眺めた。ホロピリ湖の底には、かつての浅野炭鉱をふくむ浅野の市街が眠っている。炭鉱で栄え、多くの朝鮮人労働者をタコ部屋労働で酷使した街は、いまは見る影もなくなっているが、こうした歴史を知らなければならぬことを一行は痛感した。

学生研修記

【朝鮮人・中国人の虐待と酷使】



小林真弓

地域経済学科2年
札幌北陵高校出身

日本政府は日中戦争による労働力不足を補うために朝鮮から労働者を日本国内の重要産業に「移入」する労働動員計画を策定し、日本企業はすぐに朝鮮に乗りこんだ。はじめは「募集」、のちには「官斡旋」により朝鮮人が集められ、70万人の朝鮮人が日本国内の炭鉱・鉱山・土建業に投入されたという。浅野炭鉱では56名の朝鮮人労働者が死亡している。

昭和炭鉱では5名の中国人行方不明者があったが、そのうちのひとりが劉連仁さんである。劉連仁さんは日本軍によって1944年9月、山東省から沼田町に炭鉱労働者として送りこまれた。虐待と酷使に耐えきれず劉連仁さんは1945年7月に仲間4人と逃亡し、日本の敗戦を知らないまま13年間も山野にひそみ、1958年に当別町で発見され保護された。

これまでニュースで何気なくみていた在日朝鮮人や強制労働についても、もっと目を向けたいと思う。

【人権無視の囚人労働】



福井秀法

地域経済学科3年
札幌藻岩高校出身

明治の囚人労働には大きな衝撃を受けた。これらの労働者たちは「もともと囚人は悪人なのだから、たとえ死んでもやむをえないし、むしろ監獄費が増えて困っているのだから工事で死んでくれれば好都合だ」とみなされ、人権無視で虫けらのように扱われていたという。囚人たちは逃亡しないように重りをつけた鎖を足首につながれたまま働き、粗末な食事しか与えられず、病気やケガでも休めなかった。このような囚人労働で北海道の一部の道路がつくられた事実に胸が痛む。

強制労働は囚人労働からタコ部屋労働に移行していった。タコ部屋に投入する朝鮮人の強制連行は1939年の「募集」に始まり、この年から沼田町の浅野雨竜炭鉱・昭和炭鉱への移入がおこなわれた。連行者数は1945年までに浅野で697名、昭和で630名にのぼり、十分な食事もなく早朝から夜まで身体を酷使させられたという。

写真キャプション

① 沼田町郷土資料館。②ホロピリ湖。③ バーベキュー準備。



山田誠治ゼミ I

YAMADA Seiji Seminar I

参加学生数 11人



研修地・日程 函館市

- 10月19日 FM いるかを取材・見学
函館山から展望
- 10月20日 函館市地域交流まちづくりセンターを訪問、解説
フリーマガジンJamの発行元ユウキ企画を訪問、解説
ニューメディア 函館センターNDCを訪問、見学と解説

函館の地域メディアの現状と戦略の調査



山田 誠治

地域経済学科
教授

研修目的

函館市は道内で長い歴史を持つ都市で、伝統と蓄積があります。その歴史的な背景と蓄積を踏まえ、特徴的な展開を遂げている函館の地域メディアの実態と課題について、実際に触れ、担い手の思いに接することで、地域メディアの課題と戦略について理解することです。

総括

今回の函館の地域研修では、実際に街中で地域のメディアについてのアンケートを行い、市民への浸透度・認知度を踏まえて各地域のメディアを取材した。学生たちが理解したのは、それぞれの地域メディアの特徴が、その戦略に反映されていること、また、その展開の中で困難を抱えることがありながらも、様々な模索と新たな取り組みが追求されている、ということだったのではないかと。

まず、アンケート調査の結果をみると、それぞれのメディアはそれなりの認知度を獲得しているものの、市民の中での受けとめは必ずしも深いものではない、という到達点が確認できた。その上で、それぞれのメディアを訪問したが、送り手の立場からの話から、それぞれの歴史と経過、そしてその途上での工夫について、担当者の直接のその取り組みを聞くことができ、その苦労と思い、そしてその情熱について触れることができ、メディアに限らないことも含め多面的に学べたようであった。

彼らが、現場の担当者のそれぞれの話を聞きながら、そのあり方の違い、しかし、地域の人たちの人と人とのつながりをなんらかの形で紡いでいるのが地域メディアだ、と考え感じられたと思う。

学生研修記

【日本最初のコミュニティFM局の探求を理解】



松尾拓磨

地域経済学科2年
岩見沢緑陵高校出身

私が最初に訪問した日本で最初のコミュニティFM局、FM いるかで最初に思ったのは、その立地している場所についてです。FM いるかの放送局は、ちょうど函館山ロープウェイ登り口近くの斜面に位置していました。しかも、話を聞くと地震に対しても安全であるように立地され、コミュニティ放送局の災害時対応にも備えていることに、その役割から照らしてうまく考えられていると感心しました。

また、ラジオの聴取率を高める努力についても考えさせられました。数年前、聴取率があまり芳しくないという調査結果を受け、大胆にラジオ番組の作り方を変えたのだそうです。要約すると、ラジオ製作に専念し、出演する人が、周りの人をリスナーとして巻き込んでいく、という戦略で、このように聴取者の輪を広げていけるのは、まさに地域メディアならではの、と考えました。

【アンケート調査で理想と現実を実感】



喜多亮介

地域経済学科2年
北海高校出身

私がこの研修中一番印象に残っているのは、アンケート調査の結果と現場との関係です。私たちのアンケート調査は、函館市五稜郭地区で、地域メディアへのそれぞれのメディアの認知度と、その番組について聞きました。短時間の調査ではありますが、わたしたちが調べた結果では、ラジオを除いてあまり高い結果はでませんでした。

その上で、各メディアを訪問したのですが、地元のラジオ局は、いろいろな地域にアンテナを張り巡らして情報を集め、地域の気象災害の情報を提供し、そのための苦労を聞いてアンケートとの相関について納得できました。また、コミュニティマガジンでは、そのコンセプトが、情報を加工し提供することに意義を持たせ、お店の販売促進に目標を置き、地域経済に貢献できている点に感心しました。いずれにせよ、送り手とその受け手との関係をどう築くかについて、いろいろ考えさせられました。

写真キャプション

- ① FM いるかの局長さんに聞き入るみんな。② CATV局NCVのスタジオ見学。③ 街頭で地域メディアのアンケート調査。④ 地域交流まちづくりセンターで説明に聞き入る。



山田誠治ゼミⅡ

YAMADA Seiji Seminar II

参加学生数 16人



研修地・日程 沖縄県糸満市・那覇市・北谷町・読谷村・浦添市

10月19日 沖縄県平和祈念資料館を見学
FMたまん（糸満市）を訪問、番組出演
10月20日 琉球新報新聞博物館を見学
FMレキオ（那覇市）を訪問、番組出演
FM読谷（読谷村）を訪問、番組出演
FM Nirai（北谷町）を訪問、番組出演
10月21日 FM21訪問（浦添市）、番組出演
10月22日 自由行動

沖縄の地域メディアの現状と地域社会を体験する



山田 誠治

地域経済学科
教授

研修目的

沖縄県の地域性への理解を深めるため、その歴史や文化、また戦争や基地問題などに関係する地域を訪ね、各地域に密着したコミュニティFM局の現場に触れ、番組作りやその担い手の思いなどに直接接することによって、地域に根ざしたメディアのあり方について体験すること。

総括

今回の沖縄の地域研修では、沖縄の各地域のコミュニティ放送局を直接訪れ、各地域のメディアの取材を行なった。学生たちが理解したのは、ラジオと沖縄県民のつながりの深さで、北海道のコミュニティ放送局ともまた違う取り組みについて触れることができたことだろう。沖縄民謡を流す局や、沖縄独特の口調であるうちなーぐちの番組を流す局など、地域に根ざした番組作りを目指すコミュニティ局の現状を深く知ることができ、学生がスタジオで番組に出演することで、肌でコミュニティ放送局を実感できたようだ。

また沖縄戦についての歴史も平和祈念資料館や琉球新報に行くことで学ぶことができ、それに関連して現在の沖縄基地問題にも触れることができ、爽りある経験であったと多くの学生が語っていた。

彼らが現場に行って最も感じたことは、沖縄の人たちは人と人とのつながりを重要だと考え、それぞれなりに自分たちの住んでいる沖縄というものに誇りを持っていることである。そして、その文化や情報を発信している地域メディアの担い手の人たちと出会い、熱い思いに接することで、人の絆をさらに地域のメディアが強めているという関係を実感したのではないだろうか。

学生研修記

【コミュニティFM局で情報発信の意味を実感】



森下 隼吾

地域経済学科3年
北広島高校出身

この研修を終えて、100局あれば100とおりのFM局が存在しながら、それぞれの地域メディアの地域に対する取り組み方や、それに対する地域住民のレスポンス、そしてそれに支えられて地域が元気になっていく、ということを実感しました。

ある局の方の話ですが、地域住民がメッセージを発信すると、そのことでその人が地域の為に自分でも何かできる、という事が実感されはじめ、地域に対して愛着を湧くようになり、また、行政の方も当初は面倒くさそうに情報提供していたのが、今では活き活きと地域の為に情報を発信するようになる、とのことでした。「情報を発信するという事」は、その先自分の意識も変わるという意味だと考えられます。これが、地域メディアが情報を発信し続け、それを受け取る住民と一丸となって地域を作り上げ、結びつきを深めていくメカニズムだと感じました。

【琉球新報が伝える沖縄の歴史と現実を実感】



渡辺 さゆり

地域経済学科3年
森高校出身

私がこの研修中最も印象に残ったのは琉球新報です。昔、日本は戦争をして、沖縄では地上戦があった、ということは知っていましたが、琉球新報新聞博物館の館長さんの話を聞き、沖縄はまだ戦争は終わっていない、と感じさせられました。沖縄と新聞の歴史の展示、戦時中の新聞や写真、中には最近の記事においても戦争の傷跡や、基地問題に絡んだ事件が掲載されており、私たちが普段読む新聞と比べ戦争の伝え方に差を感じました。基地を写した航空写真で見た沖縄の基地の広さには驚き、実際に車で道路を走るすぐ上を飛行機が飛んでいくのを数回体験し、それだけで怖さを実感しました。

こうした現実を、沖縄の人は何十年も“我慢”していると思うと、日本は何をやっているのだろうと考えさせられ、それを伝えつづける琉球新報はとても重要な役割を果たしていると感じました。



写真キャプション

① 基地の現状に驚き。② 到着当日に早速FMたまんに出演。③ 開局2年目の熱いFMよみたんで解説。④ 浦添市のFM21では加藤登紀子さんと偶然的遭遇。



地域研修報告会 | 2010年12月4日 AV4番教室、40番教室、50番教室

2004年から始まったフィールドワーク型講義「地域研修」は今年で7年目を迎えました。ゼミ単位で実施される「地域研修」は、教員の指導の下、学生主体で研修テーマ・内容の決定、事前学習（対象地域の歴史・経済の調べ、統計資料の調査、質問表の作成など）、そして現地での研修が行なわれ、その成果を履修者全員参加の「地域研修報告会」で発表します。報告会に向けてのまとめ作業を通じ、また、報告会で他のゼミの発表を聞き自らが学習した地域と比較する中で、問題意識をより明確化していくことが可能です。

本年度の「地域研修報告会」は12月4日に行なわれました。本年度の地域研修ゼミは24、履修者数は382名と前年度同様に多く、報告会会場も3つの会場を使って、同時並行で実施されました。

参加ゼミは報告会に先立って、研修内容をまとめた資料（A4用紙2枚）を提出する方式とし、報告会当日には各ゼミの研修内容が一望できる「報告資料集」が全員に配布されました。この「報告資料集」に加えて、参加ゼミはプレゼンテーションソフト（パワーポイント）などを使って研修結果を拡大スクリーンに映し出しながら発表しました。スクリーンには研修日程、研修テーマ、研修内容、さらには研修風景の写真などが提示されました。各ゼミわかりやすく伝えようとする工夫が見られ、過去に実施された報告会の経験が十分に継承されていることを実感しました。

各ゼミの発表後には、昨年に引き続き質疑応答の時間を設けました。鋭い質問に対し、回答に苦勞するゼミがある一方で、適切な回答をするゼミもありました。この質疑応答の時間を設けたことにより、発表するゼミ生は、大勢の前で発表する難しさやその意義を実感することができたと考えています。





地域連携事業ゼミ現地報告

水野谷ゼミⅠ・Ⅱ研修成果報告・意見交換会の開催 [2011年2月22日 鹿追町]

2010年度地域研修では、5ゼミが大学と地域の連携に寄与することを目的に、「地域連携事業」として地域研修を実施しました。水野谷ゼミが2月22日に研修先の鹿追町で行なった、研究成果報告・意見交換会を紹介します。

舟越先生のご協力によって、舟越先生、町教育委員会指導室長、町内小中学校・高校の教頭先生8名、計10名の教育関係者に参加していただき、鹿追町民ホール会議室にて意見交換会を開催した。

まず、研修成果として、昨年12月の全国学生経済ゼミナール大会で発表したゼミナール論文を舟越先生および教育委員会に提出した。そして、昨年9月3日の研究大会において小中学校・高校の公開授業を視察した感想を述べた。

さらに、提出したゼミナール論文の「第6章 鹿追町小中高一貫教育」の内容をふまえた上で、今後の鹿追町小中高一貫教育の課題として、①文部科学省研究開発指定期間終了後の対応、②高校での

カナダ学強化、③日本の教育システムの問題、を指摘し、それぞれについて学生なりの改善策を提案した。

指導室長をはじめ教頭先生方は学生の率直な提案を真摯に受け止め、今後の検討課題としてくださった。また、小中学校・高校のそれぞれの立場で教頭先生からご意見もいただき、舟越先生とは特に、鹿追町の小中高一貫教育における高校の位置づけとその重要性について意見交換することができた。

学生なりの考えや意見を発表し、それについて意見交換することが鹿追町の地域教育および地域づくりの発展にわずかでもつながれば幸いである。



写真キャプション

[1][2][3][4][5] 鹿追町民ホールで行われた研究成果報告・意見交換会。[6][7][8][9] 意見交換会に向けての準備。

